

独りごと

小三木 報淑

言葉がその意味を喪失し、
男が女を、女が男を理解しあえない今日、
私達は怒りとこのしりの中で、
あじけない人生を過ぎさろうとしている。

私達は未采永劫に救われないのだろうか。
この想い、漠然としたむなしさ
何時の日か革命をやるんだと言っていた
あの少年が今は云う、独歩独歩と。

私は確実に何かを失なった。
それが何か解っても、
空白を埋めつくす術もない。
全智全能の神よ！ 助けたまえ。

SSSS目

次SSSS

九・一六大杉栄虐殺四十九周年追悼集会の報告	天地真理雄	2
革命への人々の意識構造	中津川礼二	11
「京都NON連」を乗り越えるために	成田 隆	17
底 吠	三山 誠法	24
無 題	般若 醉狂	28
鎮魂歌	荒畑 涼子	28
まやかし	堀本 吟	30
詩特集「御霊園口哲郎こと寒苦鳥頑愚こと北山基明」	大 三元	34
我が斗争		41
資料I 日本アナキスト連盟の解散と「自連」の発表		48
資料II 全関西ノンセクト連合救対規約		51
あとがき		54

9・16集会 圧倒的に貫徹される！

9・16集会実行委員会

我々によって企画され貫徹された初の大衆集会としての大杉栄虐殺49周年追悼集会は台風20号の荒れ狂う京都府立婦人センターに百数十名の圧倒的な結集をもって成功したことを全国、全関西の全ての闘り同志に報告する。集会は、最初基調報告によって開始され、次に国家権力との非妥協的永続的な闘いを24時中貫徹している釜共闘からの斗争報告と支援要請がなされ、万場の圧倒的賛意を勝ちえた。

次いで桃山学院大学の山口光朗氏の講演があり、そこにおいて氏はあの半世紀以前における大杉栄の日本叛権力運動における役割とその位置について、現在進行しつつある保安処分や第三世界人民の叛権力斗争とからめて実証的に展開された。

次いで実行委員会から札幌アナ研、日本アナキストクラブ、群馬黒色戦線社、宇都宮大アナ研、元ハレンチ全共闘、東京朔風会、神奈川徒人社、その他の諸々のアナキスト組織・個人からのこの集会への連帯が明らかにされた後、はるばる名古屋の地より参加された名古屋無政府主義研究会のアピールが行なわれた。次に福岡方法のアナキズム研究会、及び他のアナ研のアピールが予定され

ていたが、当日集会場において辞退され、我々関西の諸戦線の決意表明、アピールに移った。最初学費阻止斗争を主体的に担ってきた竜大アナ研が力強く以降の叛権力斗争を全実存をもって闘い抜くと宣言し、次に桃山学院大アナ研・スペイン革命研究会からの報告、ついで黒色連合によるアピール、京大アナ研からの決意表明、京大農学部自治会からの斗争報告、大市大実践のアナ研・学部連合による状況報告が行なわれた。(他グループ、個人は時間的制約の為に発言できず。)最後にこの集会に公開質問状をもってのり込んできたSRFが若干の訴えを行なった後、司会者が若干のまとめを行なった後、散会した。

我々はこの集会の意義として(1)大杉栄追悼集会といながらも関西の地において公然と行なわれた我々による最初の事実上の政治集会であり、そして(2)台風20号の暴風下において私鉄の全面ストップ、市電市バスの全面ストップ、それに加えた国鉄の順法斗争という悪条件にもかかわらず、百数十名の結集を勝ちとったことは大きな成果であり、(3)この集会は全国的、全関西的な連合行動への飛躍の第一歩であることをここに確認し、それが故

に今秋期斗争をその突破口として位置づけた。我々はこの集会において釜共闘への連帯を表明したが、我々はこれをますます深化させると共に、全国、全関西の全ての闘り同志との連合をより強力に推進すると共に、全ての

大衆運動の原動力かつけん引力として自らを更に高めて

九・一六大杉栄虐殺49周年追悼集会への

招 請

反革命弾圧体制を強化し、己れらの与えた「市民的自由・基本的人権」を無視し、一切の闘り部分に対する権力の暴力的圧殺は増々強まっている。此の凶暴な権力のテロルの嵐に抗し、日々不断に叛権力斗争を貫徹されている全関西及び全国の無党派自立革命派の戦士諸君に、まず無条件に連帯の意を表したい。

六十八年メーデーを現実的出发点として、我が関西におけるアナキズム・ノンセクト運動が種々な集団・個人によって任われてき、そして六十八・九年の学生叛乱はマルキシズム諸党派の党利・党略を止揚する大きな可能性を有し、全く新たな大衆の革命運動としての全共闘運動を創出せしめたにもかかわらず、マルクス主義に対する学生大衆の幻想を破碎するには至らず、我々の側の主体的力量不足によって、強大な権力の暴力的圧殺の前に数歩の後退を余儀なくされている。そうした現在の

いかなければならない。

今秋期斗争勝利！ 国家解体、人類解放！
国境廃絶、永久革命！ 叛権力、総破壊！
資本主義撲滅！ 国家共産主義撲滅！
中央権力主義粉碎！ 無政府・無権力社会創設！

状

九・一六集会実行委員会

状況を明確に踏まえつつ、我々が今再び学園・工場・地域等の個別境界を乗り越えて各集団、各個人の相互間における新たな連帯と全国的な連合行動の巨大な基盤を構築するための最初の試みとして、我々は今回、戦前天皇制権力の凶悪なテロルに倒れた無政府革命運動の先達、大杉栄の四十九周年集会を提起する。

もとより我々は、大杉栄虐殺四十九周年をたんに記念する為にこの集会を企画したのではない。すなわち叛権力運動に生きる我々は、大杉栄の叛権力思想・行動の把握を通して、今後の闘いに糧とする我々自身の内実を形成したいと思う。またそれが真に大杉栄を追悼する事になるのだ。

ところでいまや革命思想としてのマルクス主義は明確に破産し、世界はアナキズムを希求している今日、我々はその日本アナキスト連盟のような不毛な敗北・解体を

絶対にくり返してはならない。一度目はマンガで済むが二度くり返せば反革命なのだ。

我々はいまこそ、国家解体、人間解放、絶対自由の黒

実行委員会への公開質問状

社会革命戦線

我々は、無党派自立革命派と自称する諸君が、無政府革命運動の先達たる大杉栄の追悼集会を開くことは、アナキストたらんとする私達にとって喜ばしいものであると考えます。

しかし、9・16大杉栄虐殺49周年追悼集会への招待状を受けとった私達は、主催者の見解に多少の疑問を持たざるを得ないので、若干の質問をしたいと考えます。主催者の明瞭かつ責任ある回答を期待します。

質問

- 一、文中「無党派自立革命派」とありますが、「無党派自立革命派」とは一体何ですか。
- 二、文中「アナキズム・ノンセクト運動」とありますが、「アナキズム・ノンセクト運動」とは一体何ですか。
- 三、文中「無党派自立革命派の戦士諸君に、まず無条件に連帯の意を表したい。」とか、「アナキズム・ノンセクト運動が様々な集団・個人によって任われてき」あるいは、「全く新たなる大衆的革命

旗を未来に向けて高らかに揚げる。

同志諸君！九・一六大杉栄虐殺49周年追悼集会に結集し、共に叛権力無党派自立革命派の連合戦線を構築せよ！

としての全共斗運動」「無政府革命運動の先達大杉栄」「いまや革命思想としてのマルクス主義は破産し、世界はアナキズムを希求している。」等と書いてあります。これらのものは、緊密に関連し、同じものを意味しているように、私達には受けとれるのですが、果して無党派自立革命派アナキズム・ノンセクト運動が全共斗運動が無政府革命運動がアナキズムなのか。違うとすれば、どのように区別し、連関させているのですか。だいたいにおいて一致するのであればその根拠は何ですか。

- 四、文中「68・69年の学生反乱はマルキンズム諸党派の党利・党略を止揚する大きな可能性を有し」とありますが、止揚とは何ですか。
- 五、文中「今日、我々はこの日本アナキスト連盟のよりな不毛な敗北、解体を絶対にくりかえしてはならない」とありますが、自ら解散したアナキスト連帯と評価する根拠は何ですか。

以上について、実行委員会の回答を得たいと思います。願わくば、最っとも古くから過去一貫して、かかる見解を保持している○君の回答を願いたいと思います。最後に、私達の若干の見解を簡単に述べたいと思えます。

- 一、ノンセクト運動について
ノンセクトと言うのは思想ではありえない。ノンセクトとは、マルクス主義諸党派に入っていない人達をさし、ノンセクト運動とは、いかなる思想運動をも意味しなく、単なる運動形態ではない。それにノンセクトの人達の大部分が未党派ではない。それこそでないノンセクト諸君（前衛党主義を否定するノンセクト諸君）にとってさえ、党派に対するアンチ的存在ではない。したがって、自己の主義主張に基づいて、組織し、行動していくならば、無党派などではなくもつと他に名付け方があるはずだ。
ノンセクト主義論者
☆
ノンセクトが純化されれば、将来かならずアナキストになると規定したり、ノンセクト運動が、自己成長的

にアナキキに達すると考えるのは、ノンセクト（運動）とアナキスト（アナキズム運動）の同質化を計るものであるが故に、アナキズムを水で薄め、アナキズムの原理・原則の捨象を計るものである。少なくとも、彼らノンセクト主義論者はアナキストではない。
二、アナキストとノンセクトの関わり
以上から我々は、ノンセクト運動を単一には評価しえない。なぜなら、ノンセクトには一定の主義・見解など存在しないからだ。私達は、ノンセクト諸君の一人でも多くがアナキストとして社会革命運動に登上することを期待し、できるかぎりの手助けをしたいと考えている。
三、アナキスト独自組織の必要性
まさに、これらのことを遂行していくためにも、明確なる主義主張を掲げる無政府革命者の組織が必要なのであり、それは、自覚したアナキストによって組織される以外にない。かかる組織の建設と、社会革命の発展は、不可分一体であり、決して矛盾するものではない。

公開質問状への回答書

9・16集会実行委員会

今度我々9・16集会実行委員会は台風20号の暴風圏下

にあり、一切の交通が途絶した困難な状況下で、京都府

立婦人センターにおいて百数十名の圧倒的な結集をもって貫徹された大杉栄虐殺49周年追悼集会において、S R F（社会革命戦線）と称する一部の諸君からこの集会に関する主催者の見解を要求する公開質問状を受けとった。我々はこれに答える前に、若干の事実関係と我々の彼等の姿勢と行動に対する批判をのべた上で、彼等に対してではなく9・16集会を企画しかつ貫徹した者として、全ての人々に対し我々の姿勢を明らかにしたい。

まず彼等に対する疑問の第一点としては、何故当日にしかこのような行動を行えなかったのか、である。我々実行委員会は8月初旬までに、今日迄に我々と共に叛権力斗争を斗ってきた部分において結成され、そこにおいて我々の連絡可能な限りのアナキズム・ノンセクト運動を担って来た部分に対し、この集会への結集を呼びかけることに決定したのである。それが故にS R Fの諸君に対しても郵送で、あるいは口頭でその参加を呼びかけたのである。だからS R Fの諸君の集会への参加ばかりか実行委員会参加への道は開かれていた筈である。これはS R Fの諸君が忌みきらいう自連社の諸君へも同様である。これらに対しS R Fの諸君は実行委員会に対し、何等返答をしてこなかった。当然それが故に我々はS R Fがこの集会に参加するものであると思っていたし、同様に返事のなかった自連社の諸君は、当日もやはり欠席した。自称アナキスト革命に責任あるS R Fの諸君が、この集

会に参加する事に何等の意義をみいだし、集会に参加するのであったならば、我々実行委員会に対しても、もつと何等かの働きかけがあつて当然であつたと思われる。次に第二点として、我々の基本的姿勢に疑問を持ち、その姿勢を否定するものであるならば、何故それでこそ実行委員会への疑問を実行委員会に参加することによって克服しようとしなかったのか、という疑問が逆に我々に存在する。このような公開質問状はその時点において提出され、それが克服されなかった時において、今集会における行動がおこなわれるべきであり、それが最上の手段であると考え。

第三には、以上の事がS R Fの諸君にとって無意味な事と思われれば、こつこつ公開質問状を出す事が無意味である。「社会革命運動」第3号の主張からすると、我々とS R Fの諸君とは立脚点が異なるのであり、S R Fの諸君は自らの主体性をもって別の集会を行なうなり、さもなければもつと叛権力斗争に有意義な事をなすべきである。それとも、S R Fの諸君はこの集会を粉砕する事が、叛権力斗争にもつとも意義があるといわれるのですか？ それならば公開質問状という恥知すなまねをせず、ゲバルトをかけてくることですね。いつでもそれ相應の対応を我々はなす覚悟があります。考えてもごらん。68年以降一貫として対権力、対セクト斗争を闘い抜いてきた我がゲバルト力！そして何もせず、他者に対す

るケチつけばかりに狂奔し、それ故に分裂してばかりしてきたS R Fの諸君！君達の歴史はその事を如実に物語っている。自連社や麦社・C S Lに対する批判はまだ許せる。京都の全共闘運動を主体的に担ってきた部分やアナキスト革命委員会や百姓一揆派・N P R研究会に結集する部分に対し、自らの非戦斗性、日和見性故にそれを憎悪し、悪口を投げることによって自己の政治的延命を図ろうとした諸君！一体全体君達は何をやってきたのだね。

以上考えると公開質問状に答えるのは馬鹿らしいが、自称アナキストの彼等のこと、我々が答えられなかつたというデマを流されると困るので答えることにしたい。

〔回答1〕

無党派自立革命派とは、我々が基調報告において明らかにしたように、我々自身の立脚している運動の地平と今後目指すべき方向性を意味すべく、目的意識的に創造された名称である。すなわちS R Fのような一貫して叛権力斗争を担い切れなかつたにもかかわらず、今後その展望もなく、我々へのケチつけにだけ狂奔しているにもかかわらず、無政府革命者の組織をすでに建設しはじめている（実は「社会革命運動」とかいう新聞を3回発行しただけにすぎない。）と恥しらずに主張する密教主義的、革マル主義的アナキスト（アナルコ・ボルネヴィキ）、そして麦社・C S Lのように現実の斗争課題

にも応えきれず、日本アナキスト連盟の正統的継承者としての地位に甘んじ、結果として反革命に転落している構改革的アナキスト、又、自連社のようにアナキズムを標榜しながら結果としては、アナキズム運動の展開を為しえなかつた日和見主義的アナキストと我々の立場を明確にし、又今日無党派の多くを占める未党派部分を目的意識性をもつた自立派として結集すべく我々が自らの運動グループを自称する名称である。

〔回答2〕

我々はS R Fの諸君が誤解しているようにには使っていない。（けれどアナキズム・ノンセクト運動という名称はいいえて妙である）さて、これはアナキズム・ノンセクト運動という単一の運動ではなく、「運動」はアナキズム運動・ノンセクト運動というように両方にかかっている。すなわち我々は目的意識的にアナキズム運動を追求している部分と未だノンセクト運動の段階に存在する未自覚的アナキズム運動の部分への連帯を表明し、かつそれを積極的に評価するが故に並列したのである。偉大な国語学の権威であり、それだけに言葉の使い方には厳格なS R Fの諸君には当然理解してもらえらると思つていた。

〔回答3〕

大体そついてもいいであろう。同じく基調報告において述べたように、我々はアナキストであることを主張

するのみで実際の叛権力斗争を斗おうとしないアナキスト及びアナキスト組織を信用しない。麦社・CSL、自連社、SRF、全て同様である。その事を認識しえずに我々を批難しては、その組織の鼎の軽重を問われるだけでなく、「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」と我々に笑われても仕方がないのである。「青は藍より出でて藍より青く」ということわざがあるように、既成のアナキスト及びアナキスト組織が叛権力斗争を放棄したまま後生大事にその純血性を確保することに扱々としてゐるならば、それらは我々をも含めた大衆によってのりこえられる事は明白である。いかにアナキズムが正しくとも何等叛権力運動を担えない限りそれは存在することが無意味なのである。要するにアナキズムの「運用の妙は一心に存する」のです。それが故に我々はそのようなアナキスト及びアナキスト組織よりも、本質においてアナキズム運動への指向がみられる実践において叛権力斗争を担ってきたノンセクト運動の方を評価するのです。それは初期ベ平連運動、68年当時の反戦青年委員会運動、そしてそれは、全共斗運動へと昇化され、今日における我々無党派自立革命派形成へとつづくものである。SRFの諸君が、とはいうよりそれを構成する一個人がかつて無党派グループを形成して破産した経験により、それを全面展開することは、その特殊の時間的地域的偏差を無視した暴挙としかいいようがない。それを「墓に懲りて

醜を吹く」というのである。又、SRFの諸君の主張のように「ノンセクトとはマルクス主義諸党派に入っていない人達をさし、ノンセクト運動とは、いかなる思想運動をも意味しなく、単なる運動形態でしかない」ときめつけるのは根本的な状況把握の誤りである。すなわち我々はアナキズムが人間解放の原理であり、かつ人間自らが誰もが根源的に保持しているものであることを確信している。要するに人間は生まれながらに本質的にアナキストなのである。しかるに、個々の人間はおかれた状況においてその本質がゆがめられていくのである。そしてその結果の一つとしてノンセクトマルクス主義者予備軍という公式が生みだされているのである。自称アナキストのSRFの諸君もここにマルクス主義者の陰謀にのめりこんでいるのである。あまつさえ、アナキズムを水で薄めるのが我々の任務とかのたもうたSRFの諸君。かつて革共同のあるメンバーが「マルクス主義アナキズム」スターリニズム」と主張していたが、彼の方がよっぽどまじである。「小人閑居して不善を為す」。現実の斗争とは全く無関係で全ての大衆から遊離して、観念論で頭デッカチのSRFの諸君がこのような状況認識に落ちるといふことはむべなるかな、ですか？

〔回答4〕 御存知のように「止揚」とはドイツ語の「Aufheben」の日本語訳で「2つの矛盾した概念が調和して、更に高

い概念を生ずること」または「飛躍」を意味し、今回の場合は後者の意味である。すなわち68・69年の全共斗運動がマルクス主義から出発しながらも、明確にマルクス主義運動の限界性を突破して、自己目的的にアナキズム運動の地平へ昇化しようとしたことを意味する。今日の我々の運動もそこから出発し、現在に至っているのです。またSRFの諸君が「止揚」という語をマルキストの単語として使用を排斥し、それを使った我々を非難するところのならば、全くの歪小化した姿勢としかいえない。

〔回答5〕

全く馬鹿な質問ですが答えることにする。我々の手許にある辞書によれば「解散」とは「集まっている人がわかれ散る」ことであり、「解体」とは「ばらばらに離れる」ことを意味する。さてSRFの諸君は日本アナキスト連盟が自ら解散したから「解散」であって「解体」でないとい主張している。我々はどちらでもよいのであるが、「解体」の方がより事実を現わすとみて「解体」をとった。要するにアナ連は戦前のアナキズム運動を継承・発展させるべく結成され、その目的を達成しないうちに、「発展的解消」という美辞麗句で己をかざって、結果として敵前逃亡をしたのである。そのことはまさにアナ連が解散時においてその機能を喪失し、その存在意義を見失っていたことを意味する。それが故に我々は恥知らずなSRFの主要メンバーと彼等から売文業者、エセアナキ

スト、プロマルキストとののしられている麦社・CSL、自連社を結成したメンバーにより、その解散を宣言される前にアナ連はその機能を停止し、風化し解体していたと主張するのである。それが直視すべき現実なのである。

〔最後に〕

我々はSRFの諸君に今訣別の言葉を送る。我々は諸君の主張するような「アナキスト」ではない。まさに誰がアナキストであり、誰がアナキズムを水でうすめるものであるのか、そして誰がアナキズム革命を永遠の彼方へ追いやるのか。それは歴史が審判を下すであろう。我々は我々の信ずる所を歩んでいくものである。我々と袂を分かつものは己が信ずる道を歩めばよいであろう。SRFの諸君のように我々がアナキズムから離れていくと考えるのはまさに杞憂である。「前車の覆轍は後車の戒め」。我々はARF・SRFや麦社・CSL、自連社の諸君の歩んだ道、我々が一時的にはまりこんだ道を再び歩みはしない。「復た冥下の阿蒙に非ず」のように我々は一昨日成長していくつもりである。人のフンドシですもうをとろうとはかりしているSRF諸君！「先ず隗から始め」ることです。現在のように「百年河清を俟つ」ていても、誰も諸君の下に結集しないだろうし、当然の如くアナキズム革命はやってこないよ。状況と己の主体的力量を何等かえりみずに戦斗的言辞のみ吐き、空想に耽ってばかりいては、自己批判書ばかり書かなければな

らない破目になることを認識せよ。今日の君達の勇気を「匹夫の勇」といい、君達が革命から離れていく状態を「多岐亡羊」というのである。自らの革命への展望を明らかにせず、主体的行動をなくして、絶対に運動が存在することはありえないのに、他者にその責任を転嫁し、組織温存を図るといふ体質、それを改めることができないならば「病膏盲に入った」としかいいようがない。それはS R F諸君を歴史のくずかごの中へと誘うだろう。要子与に謀るに足らず。」

〔付〕
 なお我々9・16集会実行委員会及び全関西無党派行動戦線(連)は、S R F諸君が、今回の公開質問状および彼等の自称機関紙「社会革命運動」において、我が戦線の同志および自連社その他アナキズム運動関係のメンバーに対し、実名を使用したことに対し、これらの策動が国家権力に対して明確に彼等以外のアナキズム活動メンバーを売り渡すものであることをここに確認し、断乎これを糾弾するものである。かつ又対権力上の配慮から我々はS R F諸君とのタワ言の交換を今回限りのものとみなし、以降これ以上内部事情および虚偽と誹謗中傷をくりかえすものならば、彼等が明確に国家権力の走狗となり下ったものとみなし、明確に粉砕することをここに大衆的に宣言する。

一九七二年九月二十三日

黒色戦線社―新刊書案内―

- 難波大助大逆事件 定価九〇〇円
I. 虎ノ門で現天皇を狙撃!
 - 無政府主義とサンジカリズム 定価一五〇円
石川 三四郎 著
 - 進化と革命 定価一五〇円
エリゼル・ルクリュエ 著 石川三四郎訳
 - 弁証法的唯物史観の批評 定価一五〇円
石川 三四郎 著
 - 正義と道徳 定価二五〇円
クロボトキン 著 麻生 義訳
- 発行所 黒色戦線社
 伊勢崎市中町和田 大島英三郎方

武 良二 著

アナキズムの立場から
 強権主義の解剖
 I マルクス主義とボルシェヴィキに就て
 朔 風 会
 東京都東村山市野口町一の一五の八
 TEL 〇四三三一九二一〇九〇三(傳)
 ¥200

革命への人々の意識構造

天地真理雄

- 1、すべての革命家の義務は、革命をすることである。
- 2、革命的行動を実践するために、なにもものに対しても許しを請う必要はない。
- 3、われわれは、革命にのみ妥協するものである。
 カルロス・マリゲラ

全世界の人々が真に平和で幸福に生存できる社会というものは、幾十世紀もの以前から人々が追求し、考えたユートピア社会であるが、この理想は今もなお、全世界の人々が、思想、信条、宗教を問わず、意識的に、あるいは無意識のうちに追求しつづけているであろう。それはこの世の中で最も高尚な最上級の地上の楽園である。

それはたとえ、封建時代であろうが、資本主義社会であろうが、社会主義国家であろうが、名称がどうであれ、人々が真に幸福で、平和であることを感知せず、また、現実にとやがてないならば、その日の来る秋まで、その幸福と平和は永遠に追求されて行くであろう。事実、人々はこのようにして歴史を生きてきたのであり、一度たりとも、人々の理想とする社会は成立したためしはないけ

れども、数々の思考や数々の反乱、動乱がこれを教えている。

現在、地球上には構造上、二つの人種が存在している。このことは数十世紀の歴史を通じて、変わることなく一貫している。

即ち、支配し、管理する権力を保持する人種と、今一つは、支配され、管理され、権力を持たない、地球上で最も数の多い人種である。(いうまでもなく私達は後者であって、その立場で物を考え、行動する。ゆえに私達の言う、人類とか人々とかなどは、後者、即ち支配されている人々のことであり、支配し、管理する輩は人類とは呼ばない。)

この構造は、人々が地球を根底的に革命しないかぎり、決して変わりはない。

しかるに、世界革命―地球のどんでん返し―はなぜ数十世紀の間、据置れ、放置され、いまだ達成され得ぬのか。

それは、全人類―己の手に掛っている。支配者の巧みな支配もさることながら、全人類の自分の身可愛いさの傲慢と、他や歴史を省みぬ悪徳が世を支配しているから

である。

自分の身が大切な時は、他は同じように大切にあり、他が苦境にある時は己の苦しい時を考えれば、全人類の人と人との愛と尊重がいかに大切であるかがわかるというものだ。

人々は連合し、互いに自由で、平等でなければ生きては行けない。

いうまでもなく、我々、支配される側は多数であり、支配者供は少数だ。我々は、その気になりさえすれば、一我々の中から裏切り者を出さなければ、我々の中から支配者に媚を売る者がなければ、我々の中から愚にも支配者になれるなどと錯覚をおこす者がなければ一明日にでも全世界の革命は達成されよう。くだいようだが、支配者がどんな巧妙な支配機構を造ろうが、どんな悪しき圧殺手段を構しようが、支配者は、あくまで極少数であり、我々は多数なのである。

実際、人々は、現在の世の中が住みやすいはずがなからう。第三世界の貧困、疫病、惨殺などから、白人文明の犯罪や麻薬、コンクリートジャングルなどの精神疎外の都市問題や戦争、公害、交通事故、税金、物価高など数かぎりない病気が蔓延している。

この住みにくさ一人間の不満、不幸の度合いを分析するならば、ひとつに肉体的苦痛に対する不満ともひとつは精神的不満に分類されよう。

一、肉体的苦痛に対する不満

これは最も根源的な、生命維持の欲求であって、過酷な労働を強いられたり、食料、衣料、住居などの決定的に欠亡した場合に起こる不満である。奴隷状態はこれの最悪の状況である。

二、精神的不満

これは、物質的不満と労働に対する不満の肉体に対する精神的不満と、純粹精神的不満とがあり、それらと肉体的苦痛に対する不満とが総合されて、より高度な、理性的不満にと高められる。

A 物質的不満

これはあらゆる物質への欲望であって、食料、衣料、住居などを通り越えて、家具、備品までを含め、衣食住と、その付随品の最上級を求める欲求である。これは、元々肉体的苦痛に対する不満から発したものであるが、それが生命維持を達成した段階で、より高度な、最低限の生命維持からよりよい生活の営みへと、文明の発達の度合と精神構造の変化により、価値が変遷し、他者との比較によって発生するものである。

B 労働に対する不満

これも本来、肉体的苦痛であったものであるが、ある程度生命維持が保障され、肉体が保障されても、精神的な不満となって、肉体的不満を伴って、労働時間の短縮や、労働の質の向上などの欲求となって現われてくる。

しかし、それは一般にA、物質的不満を満すための手段として考えられているため、常にジレンマに立される。

C、純粹精神的不満

人間の本来保持すべき、自由への直接的制限や干渉などへの不満であり、①、戸籍を定め、地球平面の自由移動への制限や、細い手続きやわずらわしい公的機構、法律による精神、肉体への直接的介入や税金の強奪などの身近な、②、個々の管理への直接被害による不満や、知人、友人、親戚などに身近に起こる殺人、戦争、公害、死刑などの、③他者に対する被害への同情や、直接的に被害を受けた、④道徳への不満などが上げられる。

そして、それらの肉体的苦痛への不満や精神的不満は一般化され、社会的な不満となって現われる。

三、理性的不満

これは多分に経験的であり、知識に依拠するものであるが、最も高次な社会的、精神的不満である。

地球汚染や自然破壊、国家、法律、政府、企業などの国家主義、戦争や抑圧や支配への不満一それらは権力主義一般への不満となり、世界のどんでん返し一世界革命一への思考一それは全人類の平等で自由な真の平和で幸福な社会の創設に行き着くのである。

しかし不思議なもので、ここまで考える者は世界中に幾人でも存り、過去にも幾等でも存在した。しかし、革命はいまだ成らず。

全人類の不満解消の道は、たった一つしかない。それは、全人類の解放と全人類の地球管理のための世界革命である。

それは、各地域に権力者供が国境を引き合い、枠を作り、それによって各国に抑留され、圧殺され、管理され、支配されている人々が自らの力で、自国の政府を打倒し、国家を解体し、国境を廃絶することである。

そのためには、各地域(各国)の人々はインターナショナルに手を結び、海を越え、山を越え、同志の契を結ばなければならぬ。

我々の世界革命の達成への行動は、旧来の第一〜第四に至る共産主義インターのような、陰謀主義や中央集権主義などでは決してない。

それは、赤の他人が他人を無理矢理解放したりすることの決してない、自らが自らを解放する世界革命である。

各地域(各国)の人々は、今すぐに、己の存在する場所、武器を取り、支配機構を破壊し始めなければならぬ。そして他地域(他国)との情報の交換を頻繁に行ない、戦略、戦術を教授、アドバイスし、物資や資金を援助し合わなければならぬ。できれば、世界革命情報センターを創設し、情報交換、資金援助、物資、武器の援助をそれを通して行ない、創設出来ない場合も、萌芽的に、他の2地域、3地域と連帯し、激しい情報の交換と、来るべき社会についての理論交流や物資、武器の

援助を行なつて、互いに理解を深め合い、自國の解放への斗争を行なつていかなければならない。特にソ連軍の東歐解放のような、侵略的、植民地主義的を他者解放は決してあつてはならない。

◎日本に於る、自國政府打倒と國家の解体

日本革命の完成は決して日本地区だけで達成されるものではなく、全世界、全地球が解放されて、初めて達成される。

他地域(他國)との連帯は大變有効であり、必要である。それは戰術的にもさることながら、民族の違いや文化の違い、意識の違いや思考の違いなどを互いに理解することにあり、コスモポリタンな思想を形成して行くであろう。いかながら、日本は地球の単なる地域ではなく、國家であり、他地域も國境により分断され、人々はその中に閉込められ、自由に交流することは許されていない。(極少数の人とか、金とヒマのある人には、ある程度、旅行などの形によつて、移動が出来るものの、自國の中を移動するのと同様を移動が許されている國家はほとんどない。―労働の禁止、移住の制限、人權の無視など)

しかし、交流は大切であり、世界革命斗争と同時に進行しなくてはならない。それは出入口管理の打破であり、合法、非合法を問わない、激しい他地域への移動、交流であり、技術的にも、通信、航海、飛行操縦などの修得、

語学の学習、肉体の鍛練などが要求される。

日本の状況は、一見安定したかに見えるけれども、公害、交通戦争、住宅難や高度成長による人權無視政策などにより、精神的に爆発寸前に来ている。

支配者は懐柔政策を取り、不満を右に左に反らせ、綱渡りのに日本社会を維持している。

そして人民といえは、敗戦後27年ほど経た現在、もう戦争のことは、速い過去の出来事であつたかのごとく、無関心に陥り、ベトナムなどの戦争は速い他國の赤の他人の出来事のごとく、見捨てて、自分のためだけを考え、物質的欲求を満すため、毎月、あくせくと、アリのごとく働きまわっている。

前述したがごとく、人々が精神的に姿勢を整えれば、多数である以上、やる気さえ起こせば、明日にでも政府の転覆は可能なのである。ここで考えられるのは、政府や資本家などの権力者供の人民管理の巧妙さ、言替えれば、人民自身の馬鹿さ加減である。

人々は生命の維持が出来て、一応の生活が可能ならば、非常に保守的になつてしまふ。それはごくあたりまえのことであり、人間というものは、たとえ、頭の中で解っていることでも、行動にはなかなか出るものではない。ましてや、そんな事を思ひもしない人々にはなおさらである。

つまり現在、物質文明の高度の発達には精神的な不満を

拡大させはしたが、どうにもならない精神的な不満を實際に外部に向つて爆發させる人々は極少数であるし、彼らは常に社会的に気遣いと同等に扱われている。そして、多くの人々は、今の社会は、少なくとも昔よりはましだと思つており、戦争はないし、民主主義は高度だし、GNPも増加したことだし、アフリカや東南アジアと比べて鼻を高くし、不満ながらもマアマアだと思つていたりする。

現在、支配者供から奪取したり、与えられたりした、諸權利や諸物資は人々にとつてあまりにも大切なものになりすぎている。本来、支配される側とは、「失うべき物は鉄鎖以外に何もない」という状態であるはずのものが、支配者供が余りすぎたり、欲が出て、利口になつた彼らに、今までと同様、熱心に働いてもらうために、よりりまく管理しなくてはならないために、失うべきものをあまりに多く、借し与えずにたのである。

人々が奪取つたと思ひ込んでいる数々の權利や物質は、実は最終のものを奪うのを忘れたがため、まったく価値のないものである。即ち、権力者供が返済をせまつた時に、人々は、いやいや、一つ一つ手離して行くであろうことは目に見えている。それは、日本が戦争の道を歩み始めた過去を振り返れば理解できよう。あの侵略主義の時代に、人々が保持する数少ない「失うべきもの」を切り売りするたびに、満州專賣や日華專賣を繰返し、あ

れよ、あれよという間にみじめな戦争の道を歩んでしまつたのだ。

我々は架空の權利や小さな資産を決して、己の自由な大切な財産などと錯覚をおこしてはならない。一度、なにかが起れば、いつでも、権力者の思いのままに奪い取られてしまふである物なのだ。その時になつたら、その時で必死で守るなどと言っても、その時はすでに遅過ぎるのである。支配者たちは、一べんに奪取ろうなどとは決してしない。序々に、馴れさせながら、しづしづ人々を了承させ、時間を掛けて、一つ一つ取つて行くのだから。

多くの先進諸國がそうであるように、日本もまた、支配される側の人々は「失うべきもの」を数多く持ちすぎた。労働組合は、根本的変革などはさらさら望みず、物取り主義に陥り、資本主義制度は労働の基本条件にさえなつており、マルクス主義諸政党は、議會主義に陥り、支配者の権力を共同で支えている。

まず、ここでやらなければならぬのは、人々の「失うべきもの」への幻想を、物理的に、失うべきものであることを示してやることである。精神的な不満が増大している今日、生死のギリギリの線に行かないまでも、その不満は爆發し、社会を焼き尽してしまふであろう。

それは、食料、住居、衣類などの決定的不足や生産点のマヒなどを誘発するところの經濟機構の根底のマヒで

ある。(それは当然政治機構のマヒを当然ともなうが) そのような経済機構の根底的マヒは、天変地異、ゼネラル・ストライキ、戦争などである。

一、天変地異

物理的に工場などの建造物を、経済がマヒするだけの激しい物でなければならず、たんに地方的であっては意味がない。たとえば関東大震災の再来とか、津波で太平洋岸が水びたしになるとかいった、大規模なものではあればあるほど、経済機構は物理的に破壊され人々の不安と物質的不満は増大する。

二、ゼネ・スト

全面的国家経済のマヒを持たらし、革命の前夜の兆候であっても、革命をやる気のない労働や政党に、人々が毒されている以上なかなか出来るものではない。

三、戦争

これは、日本が一方的に勝ちまくる勝利の侵略戦争であっては意味がなく、空襲などの直接的攻撃によって、生産手段や流通機構が破壊されることが必要である。

しかし、革命達成のための条件となる根底的経済機構のマヒは、人々の直接行動―ゼネスト、生産管理、奪取―を生み出し、ますます経済を混乱させる。

ゼネストは、今のようになんか体制に組込れた現在、なかなか起りえない。それは経済機構のマヒと共に拡大再生産されなければならない。

その第一段階は、まず社会不安を増大させることである。社会不安が増大すれば人々は落ち着きを失し、精神が不安定になり不満は爆発しやすくなる。

そして第二は実際の直接行動である。

社会不安を増大させる方法は主に神経戦による。

A 神経戦

1 悪質なデマゴギーの流布

それはパンフレット、ビラなどの配布や電話作成や街頭アジ、落書、放送などの文書活動や通信放送活動などによって社会不安を増大させることである。

B 破壊活動

主におどしを目的とした、建造物破壊への行動によるアピールとスラムのデクラセ分子や街のチンピラ、学生などの暴動への煽動など、日常的破壊活動により、人々に社会の混乱と不満の爆発、革命的行動の存在を示す。

B 実践的直接行動

自覚ある大衆の他の大衆に対するアピールと現実的な社会機構、経済機構の破壊のための意識的行動であり、ある程度社会が混乱した中で行なわれるのが望ましく、ゼネ・ストを誘発し、革命へと移行して行く。

△有機的的社会機構、経済機構の破壊

1 官公庁の破壊あるいは奪取

(官理機構の破壊と切断)

2 軍、警察の破壊

3 (治安機構の破壊、武器奪取)

銀行の襲撃、破壊

4 (資金獲得及び倒産による経済の混乱)

大企業の破壊及び奪取、管理

5 (生産活動をマヒさせ経済を混乱させる)

上記の機構や組織をよりマヒさせるために、それらをつ結びつけている技術的手段を破壊、切断、奪取がなければならない。

5 通信、交通網の破壊、切断

(鉄道、道路、橋梁の破壊、奪取、電力施設の破壊、奪取、ダム、発電所、ケーブル切断、)

「京都NON連」を乗り越える為に

中津川 礼二

我々は、一九七〇年四月に全京都の自立派の諸君、無党派の諸君と共に、各戦線・個別全共闘の京都段階における連絡機関として、「全京都ノンセクト連合」を創造した。これは、学生個々のものではなく、広く労働戦線で活躍している、地区反戦派労働者をも内包し、その質に於ては、戦闘的アナキストのみばかりでなく、自立派志向を有する諸君をも包含し、党派の野合に終息せんとする、第一次全共闘運動に対する、無党派大衆よりの、一つの批判的且つ、下部よりの積極的運動の一形態であ

放送局破壊、奪取、電話管理破壊、など)

他に治安機構への浸透が非常に重要であり、生産点への介入、浸透による、決起、スト・サボタージュへの呼びかけなど言わなければならないことは数多くあるが、またの機会にしたい。

よりは革命を希求するならば、我々は人格を賭けて、権力に立向うことであり、決して権力に甘えず、つべこべ能書を垂れず、今すぐ行動することである。諸君！一度歩み出したならば決して後には引き返すことはできないのだ。

った。当時、国家権力・警察権力の直接介入、物理的介入の結果、東大安田岩が落城し、日大斗争も一名の官憲の血であがなわしながらも強力な権力の壁の前に屈服していった初期全共闘運動の衰退期であり、個別大学斗争が、その改良斗争を通じて必然的に突き当たった現体制打倒への政治斗争の我々側の敗北であり、又、個別大学斗争の範囲を単純に政治斗争へ転嫁し、街頭ゲバルト斗争へと大衆を盲動的に狩り立てていった、党派側の戦略的戦術的敗北でもあったのだ。その混乱の中から、我々は

立ち上がったのである。まさに大衆の側よりの党派の拒否、指導部の拒否である。大学解体の論理と日常性の否定・自己否定の論理から出発し、直接民主制の希求と旧態以前とした旧左翼指導部の拒否としての総ての学友を含めた大学総叛乱であったはずの闘いが、大学矛盾への闘い即政治斗争と街頭行動斗争へと無理論的に転換してしまつた中からの起ち上りであった。我々は何も、政治斗争を否定してはいたのではない。むしろ積極的に政治斗争を闘い抜いたと言つても過言ではない。党派が、その党利党略を至極命令として、全学共闘会議と言ふ仮面を着け、そのまわりにあつまる一般大衆を自己の軍団として組織し、且つ警察権力の前に、供出していったその姿勢を否定しているのであり、政治斗争一般を否定しているのでは、ない。連合は、個別各単産の闘争をいかに普遍化し永続化させて行くかが、その持つ、最大唯一の方針であつた。しかしながら、何故、我々の連合は消滅し、自ら破壊せしめていったのか。私は、今「ノン連」について、書かれた定義も、ピラも持つてはいない。それ故、私は、自分が係わつて来た、又そうであろうと思ふNON連のイメージ、あやふやな「思い出」から書かざるを得ない事を読者諸兄にわびなければならぬ。以上の点を踏まえて、私は若干の私なりのNON連に対する総括と訣別を告げなければならぬ。

(1)ノン連の活動についてである。我々はノン連を創り

タブーとし、何人位動員できるかを誇る。また、動員すればそれでよい、参加すれば、それでよい式の加入方式をとつて来た事に対する、私なりの自己批判の言葉である。それが野合に没落していった故に、連合内にレーニン主義者・中央集権主義者の亜流を内包すらしていたのである。我々無党派は、党派に入る事を希望し、拒絶されたが故に無党派にとどまっているのではない。党派の前衛意識、また前衛党建設、党物神化が、いかに革命とは無縁であるか、また、革命途上前衛党権力が、どれほど有害なものであり、民衆の権力からの解放ではなく、ブルジョア支配層から、ほとんどはプロレタリア独裁と言ふ甘美な言葉で飾られた、同一形態を有する「権力」の下に民衆を隷属化し、労働者国家と云う、労働者大衆から一切の叛乱権を取り上げ、武器を取り上げ、管理秩序の中に押し込め、再び官僚制度の下に労働者を再編し、党の下に、労働者を奴隷化せしめてゆく以外の何ものでもないが故に我々は、党を拒否するのである。否、党そのものを破壊せんとするものである。我々は、その党にかわる闘争母体として、連合を提唱したのである。我々が考へていた連合とは、「個の意志に支えられた、個の自由な連帯」であつた。それ故我々は、ノン連に結果して来た諸君に、我々が設定した斗争に結果する事を強制する事はなかつた。一切の強制を拒否し、否定したのである。そうする事が、我々に於ける我々の諸党派の「鉄

上げた。その情況と方針は前記に若干書いて来た。我々のノン連は、当時於ては、まれに見るものだった。確かに関西に於ける学生運動史上、過つてなかつた、無党派大衆の一大連合、軸を創出し、無党派の結集点を前面に現出せしめた。しかしながら、それ以上の事は、なかつたのではないだろうか。結論的に言えば、何を成し遂げたかである。この点については、随分と不明確である。何故なら、我々は会議のどの席上で、組織そのものに対する論議を行なつた記憶が、今の私にはないのである。記憶に残っているのは、個別戦線の経過報告と、デモの予定日の調整であり、具体的行動の順序のみである。即ち、連合とは名ばかりの連絡機関にすぎず、個々の戦線の野合以上のものではなかつた。これが、連合の致命的欠点であつたらう。即ち、連帯行動は組めるものの、同一のイデオロギーの下に結果するのではなく、動員が最大の目標であつたが為の結果である。その意味に於ては、我々もまた、八派諸潮流の党派意識と同じく、大衆動員至上主義に没ち入り、その動員数を誇り、結果をなして来る。諸同志を物理力としてしか見なかつた「党派」意識がうかがえるのである。今、私は「ノン連」を各戦線の野合と書いた。これには、当時より寝食を共にした多くの同志には、異論があるであらう。しかし、連合内部では、何らの討論も出来ず、否、立ち入る事を極力避け、個人の、各戦線の思想的立脚基盤に触れず、触れる事を

の規律」に対する道義でもあつたのだ。しかし、そこには、自ずから他者(同志・大衆・革命)に対する思想の相互浸透・自己点検がなされてしかるべきである。これをなさないのは「野合」でしかない。同志的結合の絆がここにあるのである。我々は、あの時点では、あえてアナキストを僭称する必要はなかつたであらう。しかし無党派運動を、レーニン中央集権主義者グループの隠れ蓑に使用させた事もまた事実である。ノン連は、全共闘が新左翼八派の野合、代表者会議的性格を有するまでに転落してしまひ、各派の動員力増強への隠れ蓑に墮落してしまつた事に対する全共闘第一次運動への警鐘の意味を持っていたのである。この事を考える時、我がノン連も彼等八派連合といかほどの差違があつたであらうかと、余は言わざるを得ない。我々は「組織」を否定する。しかしそれは、組織の強大化と必然的に有する中央集権機構を否定するのである。規律をなくした結合は、烏合の衆の結合であり、集団ではなく、集りである。言わんや同志的結合をやである。その同志的結合は、単に、同色のヘルメットを有するだけで結びつくものではない。当然にも、その結合は、相互浸透と自己点検とによつて育成されて行くものであり、その背景になるのが、同志に対する信頼であり、忠誠であるはずだ。また、規律がその領軸となるべきである。我々は、再び、六十年当時の古色蒼然たるアナキスト書斎派の途を踏んではならない。具

体的闘争を放棄した旧「アナキスト」の自由のあまい、規律を放棄した脱斗争派ではないのである。我々は、我々は具体的闘争のその質の中から、戦術の質を規定し且つ行動を行さなければならぬのである。それ故、党派の強制された規律ではなく、自己に課した同志に対する規律が要求されるのである。

(2)ノン連の性格は、その「連合主義」のあやふやさと共に性格自体の曖昧さが欠点でもあった。自立派を名乗る部分、黒ヘルメットをかぶる部分は、その内実は一切問われずにノン連に組織化されていた。組織化自体はノン連の拡大という点では、何ら問題がなかったであろう。しかし、その後、我々も含めてイデオロギーに対する、闘争に対する姿勢を相互批判し合った事があったか。とにかく参加すればよかったのである。行動日に参加する姿勢は問われなかった。否、動員力の落ちる事を恐れ、問う事を恐れたと言っても過言ではなかったろう。

当時、諸党派が、首都へ首都へと「陽のあたる坂道」をころがり落ちんとしている時、個別大学斗争を地道に闘う事は、我々のみが闘い切れると言ひ自負と共に、一面途方もない苦痛でもあった。「我々も大情況を闘うべきではないが。政治闘争をハデに闘わないと大衆から我々が置きざりにされるのではないか。」それは当時、誰れもが持っていた不安でもあった。日共||民青と死闘を繰り返している時、わずか三十から四十名の部隊で民青五

百の戦部隊を敵に回わしている時、それは正直いって、憎しみ以外何も感じられないのである。党派が新聞紙上をにぎわしている時である。それが、我々にとっては動員と言ひ裏返しの党派意識と、誰れでもいい、横に居てくれさえすればと言ひ同志に対する相互批判への欠落の、暗黙の了解であった。その「あやふやさ」が、七月八日の立命解放斗争の一つの分岐点として、立命寮闘争の終焉が、ノン連の終息を持たらず、要因の一つでもあったろうと今になって思うのである。

(3)ノン連が創造された時点より背負っていた宿命とも言ひべき、連絡会議の性格である。各戦線を相互に扶助すると言ひ方針が、実際には、後手、後手に回った事である。各戦線独自では、成し得ない対権力闘争、対スタリーニスト解体闘争は、連絡会議で各戦線の行動日の調停を行いあらためてノン連の呼びかけて各戦線に動員を要請すると言ひ、段階を踏んだ動員体制であった。政治面に於ては、これは戦略面の欠如に表われて来たのである。戦略の欠如が、戦術の巧みさを生みだした。ノン連の「主張」がなく、何故に労働者学生諸君に、ノン連の「ピラ」が配布しえたのか。その心情に訴えるのみであった。我がノン連の呼びかけに「総ての党派・ホルンエヴィキ諸党派の闘争放棄、歪曲を打破し、総ての自立派ノンセクト部分は結集せよ」と書いたとしても、真実、我々の戦略が、そのピラの中に書き切れたか。現時点で

この様な事を書くのは、坊主懺悔になるやもしれない。真実、書く事も非常に苦痛である。しかし、我々は、この苦痛より再び生れ変わらねばならない。苦痛より脱却する為にも、新しく生れ変わる為にも、我々は、明確な戦略を持たねばならない。戦術を持たねばならない。我々は、党派を拒否すると同時に、彼らとの理論闘争に勝たねばならない。現代日本に於ける理論闘争に、情宣活動にうち克たねばならないのである。過去のマルキストの誤謬を並べたてて批判して見ても、現在に於ては、何らの「力」も持たないものである。クロンシュタットの暴虐をいくらレーニンが、トロツキーが、革命的人民を虐殺したとわめきちらしても革命そのものを権力交代と捉える、彼らレーニン主義者には、馬耳東風であるし、スペイン革命の当時、スターリンは素手でファシストの軍隊に打ち向っていった人民には、何らの武器を援助せず、後方で遊んでいた共産党員には、その必要もないのに豊富な銃・弾薬を与え、スペイン革命を裏切ったのは、スターリンその者であると言ひても革命すら知らない、スターリニストには、意味をなさないのであろう。しかしながら、我々は、現時点では、彼らマルクス主義者・エセ革命思考型人間が多くの力量を有している事を認めねばならない。それ故に、我々は一層困難な闘いを展開しなければならぬのである。強力な国家権力のみなならず、権力の補完物、日本共産党・新左翼諸潮流廃絶への闘い

も開始しなければならぬ。しかし、我々は彼らに対して「問答無用」式の実力闘争を繰り返しているのみばかりでなく、日共||民青は論外としても諸党派に対しては理論闘争をいどみ、また、勝たねばならない。哲学論争に終始するばかりでなく、具体的戦術・闘争方針・戦略分野にも、我々は勝たねばならない。我々は、理論面に於いても彼らの反革命性・反人民性を暴露して、民衆の目の前で彼らを完懲なきまでたたきめさねばならぬのである。

(4)それでは、我々は再び「連合」について考え直そう。パターニンは平和・自由同盟中央委員会への理由付提議の中で、「我々の間で権威たりうる唯一のものである人間の正義からすれば、いかなる永久的義務も承認されないし、また我々は自由に基づくもの以外のいかなる権利、いかなる義務をも認めないであらう。」と書き、同時に当時のインターの組織論を批判したのである。次に長い「が、大沢正道氏の最近の書「全体革命への序説」の一文を引用してみよう。彼は、自由連合について次の如く述べている。中央集権政党及び運動の非を指摘し、アナキズム運動を論じつつ「一方、いますぐ行動に訴えなければならぬ、明日ではおそすぎるような政治課題に対しては、目的をその解決に限定した短期の行動委員会形態が必要である。この組織は場合によっては非合法となることもあるだろう。これらの各種の組織が入り乱れて活

動する。それが運動としてのアナキズムである。もちろん、これらの組織が、それぞれの分野であるいは、それらの地域で連合していくことが望ましいし、すくなくとも相互の間の情報交換のなされる事が必要である。その目的に限定して情報センターの様な組織が設立されるべきであろう。しかし基本は個々の組織の主体的な活動にあり、その充実にある。連合は個々の組織の力の充実が満ち溢れてくる時、自ら結ばれるものである。」余は、大沢氏の説が絶対であり、この意見が唯一正しいとは思ってはいない。しかし、この種の試みを行うのは、失うものより得る方が多いと思う。有効性の上から論じれば、情報センターの設立は、絶対必要であり、その下に、「黒色救援対策センター」の設置も必要であろう。」更に言うならば、情報センターの設立ではなく、地方本部の設置が望ましい。(ただし、指令部ではない。) 何故なら我々は、運動を闘い抜いていく途上、我々の主体的力量が弾力にねばらざるほど、敵の弾圧も弾力になつてくる。以後の闘争は、六十年代の如く、政治焦点に合わした、象徴闘争ではなく、同時多発型のゲリラ闘争に移行して行くであろう。この時点では単に横の連絡としての情報センターの設置に終わるので、何ら敵からの防衛とはなりえず、ましてや、攻撃に出るには容易な事ではないであろう。即ち、強大な敵の「索敵激滅網」から我々と、我々のメンバーを守る事はできないのである。

また、我々は、己れを守るだけではなく、敵を滅亡させて行かねばならない。それには、旧来のパターンでは、なんともはや、子供の遊びにしかすぎないのである。雪合戦やチャンバラごっこにしかすぎないのである。敵を壊滅させるには、有効性と戦略から論じられなければ、ならないのであり、有効性とは、大情況の変革を最も少ない犠牲で最も大きな収穫を得なければならぬのである。それは、敵権力をいかに分散化し、同時多発的に壊滅して行くかである。この判断は、小情況に規定されやすい一行動委員会単位では至難の技であると言わなければならぬ。非合法活動に於ては、言わずもがなである。これを行い得るのは情報センターと救済センターを両膝に持つ、地方本部が適当であろうと考える。過ってパクリニンは、絶対自由を唱えつつ、彼の秘密結社内部には、強力な規律を要求したと聞く。我々は、組織権力を望まない。しかし、それは、中央服従型の絶対党を否定し、また、党が一旦権力を掌握するやただちに権力の自己増殖(権力の絶対化神聖化)がなされる故である。我々はロシア革命当時より比較もできないほどの、強大化、近代化された権力、管理社会を根絶させねばならないのである。革命に対するロマンチズムだけでは、いかんともしがたいのである。衝動的かつ無計画な破壊活動だけでは、この強大になりすぎた権力を倒す事はできない。冷酷な程に計算し尽され、多少の犠牲を踏み越えてゆけ

る程の速大な計画のもとに闘争はなされねばならないのである。我々は、敵にまさるとも劣らないだけの強固な「力」を持たねばならないのである。

全ての権力を否定し、個人の諸欲望を寛容し、一切の批判は拒否し、唯一自由(?)のみ認める。それは自由連合主義でもなく、各人による各人の統治でもない。ただ自由分散のサークルであり、烏合の集りである。自由連合と分散とは違ひ。内部規律の尊重と、盲目的服従とは天と地ほどの違いがある。我々は、自らの発した言葉には責任を持たねばならないのであり、大衆に対して責任を持たねばならないのである。自己の行動には、私生活、活動に対して、そのいかんを問わず責任を持たねばならないのである。これは、なにについても言える事ではあるが、我々は民衆と遊離してはならず、言わんや民衆の敵とはなつてはならない。我々は、革命に対して自己の全生命を賭して奉仕し、また遂行してゆく上で、革命と民衆に対しては、事のいかんを問わず責任を負わねばならない。我々は、革命に対して如何に責任を持つのか。我々は、如何に民衆に対して責任を持つのか。再度我々は、己れの胸の内に問い直さねばならない。

自己の全生命を賭して、日本武装総叛乱に起て。一発の銃声、一声の論理。一発の銃声は万語の言語よりまさる。一個の爆烈弾は、叛乱をよび、叛乱は革命をよぶ。

ブランマン

梵

一号

¥ 1000

無明社

福岡市友衆亭第一町83-15

血 乱 死

その4

〒共

¥ 120

人間社

大阪市阿倍野区阿倍野筋一の七の四
ちづる荘16号 高橋 氣付

底 吠

(内的体験)

成 田 隆

今、私は、四畳半の部屋に居る。その空間の中に、二人の人物が寝ている。私は起きて居る。スタンドランプをつけたテーブルに向って座っている。四畳半の空間に三人の人間が居ることは窮屈なことだ。私と彼等二人の關係は何だろうなどは考えない。そこまで私は理論的解明することはしない。ただ友人であるだけだ。

一人は、自らの住む部屋がないので、私の部屋に居候し、もう一人は、仕事の都合上、私の部屋に宿っているに過ぎない。

深夜である。夜は私を呼び起すらしい。それというのも、私の精神活動は夜に多いからである。今も精神活動して居るらしい。しかし、欲望も夜に湧く。女性に対する肉欲が高まるのも夜である。

今、女を抱きたく思っている。抱きたく思っては、自慰行為をする。自慰行為をした後、ザルメンを処理した私は、観念の運動を行なり。私が人間であること、私が男であること。その事が観念の存在する根拠らしい。私は身体を静止させたまま、観念を飛翔させていく。そして、その観念を原点へつれもどす。

その往復運動によって、私は存在できるらしい。私は、

ふっと思いついた。部屋の外へ出て見ようと。急に身体を動かしたくなったのだ。私は、壁に掛けてある、うるしぬりの木刀を握って、表へ出た。夜気が私の身体を撫でた。三月下旬であるが、寒くはなかった。私は、私のアパートからすぐ近くの淀川の堤防へ行った。堤防の下はコンクリートで整備してあった。私は堤防を乗り越えて、真下のコンクリートの道路へと降りていった。

私は木刀をもっていることが、堤防を乗り越えることに、一種、戦陣の幻想をかきたてた。私は、裸足になり、上半身裸で、木刀の素振りをくり返した。私の筋肉は充実していくのが感じられた。汗がうっすら出てきた。しかし、夜気にふれるごとに、冷たくなっていく。私は、ふと、回りを見渡した。そこには、私の存在しかないのが、実感された。私は、いささか恐怖を感じた。風にあしらわれている紙くずそのもののバサバサという音にさえ、私は目をくはらなければならなかった。私は出来るだけ真正面を向いて素振りを続けようとした。しかし、音もしないのの後に後を振り返ったり、速くを、だれかの存在を発見するかのように凝視したりした。人間か犬猫かを。

しかし、私は、「客観性」の病氣とでも云うべき、雑念を取り払おうと、視線を一点集中して、素振りを続けた。ようやく、私は、素振りを執ように続けることによって、雑念が払い落せた。そして又、しばらく素振りを

続けた。素振りを止めてから、そのところに、しばらくじっとたたずんでいた。何の想念も浮んでこなかった。私の存在の实在性を忘れていた。ただ私は、対岸をぼんやりながめているだけだった。そうしているうちに、めまいが私を襲ってきた。私の存在は空中にあり、足元は、大地の消失のうちにあった。その時、私は「非一意味」を求めているのだと云うことは理解できた。夜気が私を呼び戻した。私の無意識は意識化され、私は部屋へ戻す根拠を、夜気は与えた。私の精神は極度に緊張しているのが分った。

その緊張は生の充実をもたらす因となることは確かである。しかし、価値とは異なるものであらうと思う。私は、沈黙の素晴らしさを味わった。言葉が、言葉そのものが、与える意味が少なきものであることの確証はここに発見した。私の生は、言葉に感じられるにすぎない。それは、私の生は言葉そのものをも超出してしまふ。私は思う。生のあらゆる領域を。私は解釈する。生のあらゆる領域を言葉でもって。

暗闇の中で一人、木刀を素振りする。その心的状態を、言葉でもって、自己認識し、他者へと共有を求める。言葉は、他者との關係的媒介においてのみ言葉でありえる。私が肉体を鍛えるのは、今まで鍛えてきたことから、一つの生理的欲求になっており、汗を出すこと、筋肉を激動さすことに快楽をおぼえるからである。特に、男性の

美徳だとか、スポーツマンとしての意識はない。ただ気持ちが良いだけである。以前、空手をやり始めた頃は、そして、その動機としては、一心に強者になりたかったからである。強者への憧れであり、それへの幻想である。言葉を超出したところの世界において、私は、美を見いだし、肉体を鍛えている時間には、無を見いだした。私はナルンズムへと落ち込み、肉体の美を求めることにもなった。

そこにおける幻想的世界は武士であり、剣客であり、空手の達人である。

しかし、存在におけるデカダンとは、私を脱自的に開示していき、その幻想世界は極端に狭められていった。私は何者なのか。私とは人間である。人間とは何か。一時、強者への幻想世界へと私は飛翔していたが、私の生の過程で「無」と抵触することにおいて、幻想世界はことごとく打ち砕かれていった。私は、裸にされてしまったのだ。私は裸だ。私はそこから出発せねばならない。人間存在の原点へと幻想世界を回帰させることによって。

私は裸でありながらも、肉体を鍛えている。生理的欲求において。私の裸に耐える原動力としての肉体の意味において。

以前ならば、筋肉を激動させることによって、一種の解放感を覚えた。が、今はそれは覚ええない。私は知ったからだ。解放の意味を。私を裸にしていくことによって、

以前の意味は、「非」意味」化していく。肉体の鍛練を止める意味もなく、やる確とした意味もない。その不受理性を抱えながらも、私は、肉体の鍛練をやっている。これからもやるだろう。

私は裸だ。

私の欲するものは何だ。

欲望は広大無辺に、ありとあらゆる欲望が私の想念の世界を駆けめぐる。

エロス宮の王、暗殺者、情死する男、野バラにつつまれたユートピアの国の住人。

放浪者、……、独裁者。

情念、想念の記号化 ー 言語化。

時間が有る、空間がある。

時空は消えない。

人間、という言語が表わすものは……

死だ。沈黙だ。

私は裸だ。

私の生命にいかほどの価値あると思えば、

虚無になれど、私は今だ生きてある。

苦悩めれど、苦悩めれど、答えは見つからず、

アアアとため息つけど救われず

救われて見たいと五体を激しく動かす。

私は裸だ。

孤独と寂リヨウに身をひたす私。

状況の重圧が全身を強迫する。

私は悪夢に憑れたようだ。

状況にかかわる私の生の無為さよ。その不安。

アア嘔吐、嘔吐、嘔吐

∧観念∨と∧現実∨の遊離の真只中に存している私は、嘔吐の連続だ。

心酔よ、熱狂よ、その時にのみ私の生がある。

現実よ、嘔吐よ、その時にのみ私の生がある。

どうしたというのだ。それは関連のことだ。

遊離、不可能

アア嘔吐、嘔吐、嘔吐。

私は裸だ。私は生きている。そして死ぬ。

私は死んだことがない。生きている過程でしかない。

死ぬことは知っている。生きていることを知っているが

ゆえに知っている。知っているが故に生きている。生

きているがゆえに死ぬのである。死ぬがゆえに生きている

死は夜を引き出し、私を「無」化していく。底なしの、

谷へと私は吸い込まれていく。気が遠くなる。しかし、

私の心は平靜さそのものだ。そこにはかえって落ちつき

がある。私は醒めている。完全に覚醒された精神は、聖

を感じ、性を感じる。エロテシズムと神聖なるものの完

全なる合一、そこから「無」がかいま見られる。曇天の

日に、雲の割れ目から、天空をかいまみるように、私は

深淵なる「無」へと落ちこんでいく。その時、私におけ

る一切の事象は消え去り、ただただ沈黙を……。瞑想

そのものをも包み込む沈黙に私はひたる。色即是空。空

即是色。存在を開示された裸の私は、私ではない。私は

私ではなく、衣装をまとった私である。裸と衣装をまと

った私は、常に「無」と抵触しつつ回帰していく。

私は裸だ。

夕日の朝日を見た。

それは私の目に灼てついた。

灰色にたなびく雲の裂け目で輝しく光っていた。

私は神を見つけたのかと。

オー神よ、GOD、と叫びたくなった程だ。

神よ、生き返れ。

そなたの息吹を吹き返せ。

しかし、それは一瞬の幻覚だった。

私は暗闇の世界へと落ちこんでいた。

深い深い谷だった。
私は落ちる、落ちる、無限に落ちる。

私には無限の高みに昇ることは不可能だろうか。

至高の存在を求める私、

深淵の谷に奈落する私、

その交点には死があった。

ファック、汚塵殿、

獣と神がいた。

そのどちらも私だった。

無題

三山滅法

鎮魂歌

般若醉狂

俺の親は一对の性交なさりし

男女ではないのです。

宇宙そのものです。

空間時間次元が偶然に一致し

性交なさりし女の胎内より出づる。

地球空間時間帯次元の内に創り出される幻想・空間のみ
に存します。

慶応百七年某月某日

樹こそ地球の唯一正しき生物なのです。

生物であることは地球の中心に頭を向けて足性器を月・

太陽その他の星の中心に向けることです。

哺乳類、両棲類、鳥類、爬虫類、浅海魚類はみな非地球
生物です。

深海魚類これこそ真の地球魚類です。

哺乳類、両棲類、鳥類、爬虫類、浅海魚類は流れ星を故

郷とし、原産地は遠い遠い山向の星です。

俺は地球人ではないのです。

地球人であることは地球空間時間次元の幻想です。
俺は流れ星放浪人です。

撲殺されたる赤軍派兵士達に
捧ぐ

射干玉の

黒きしじまに

あふれくる

燃ゆる炎の

とどまる処を

知らず

凍てつきる
白き無言の
仏たち
いま痛恨の
物こそ言わん

黒々と
雪を割りたる
木々の枝
天にも叫べ
その雄叫びを

異郷の地に散った
若きゲバリスタ達に
捧ぐ

灼熱の
白き砂塵を
血に染めし

我がゲバリスタ達の
霊よ 安らかに

散らば散れ
若き命の
尽くるところ
異郷の丘か
オリオンの下

死してこそ
生を生きたる
君達の
永遠に変わらじ
土にかえりて

欲さずも彼等の銃弾に
倒れ 傷付きたる人々へ

銃弾の

身にくいこみし
この痛み
例えてみよや
難民のころに

銃弾の
通り抜けたる
風穴に
感じたるかや
歴史のうずき
神々の
そのまた神の
御代にいけ
死したるその身
星に化しつ

合
掌

「まやかし」
荒畑涼子
けれど
開始だ：…ただ
それだけ
未明の速さに
宴はすでに
しらけたけれど
ぐるぐる酔気が
世界を変えて
ひっくり返った陽気さに
飛び入りで
踊ってみせましょ
はだか踊り
とっておきのを
ほらひょうきんに！
拍手喝采なけれども
隠し芸の果し合い
秘密にされる真剣勝負
ゴマスリとおべっかいに
必ずある

死or怪我なれば
その様に
いかつい顔はなされるな
御主よ……
共に追わんか
男なれば
遙けき風の昔より
運ばれて来るらん
花水仙……
その香りは地獄
針の山の頂きに咲く
かぐわしきも妖艶な
血の花弁の招待状
ばあていの招きは拒めぬと
ひよろりひよろりと過ぎ果てる
渡世の義理も堅ければこそ
あの世への一里塚
共に見事に歩まむとの
意気込み
そうれ！
まわるまわる風車
ここにあるのはくちぐるま
鬼が出るが

蛇がでるか
さあて！
舞台中央
御注視なされい！
何の因果か
二目と見られぬこの姿！
目も口も耳もたぬ
ほりれ
のっぺらぼうでござあー！
ごろごろごろり
ころがりながら
まわりながら
まわりをまわすよ
まわりをまわすよ
まわす！
今日で当地も
お別れなれば
二度うないこのチャンス
世にも不思議
怪奇千万！
これこの生きものこそ
ミヨちゃんとは呼ばれたる
真正銘のヒトの子

十月と十日の妊みのはてに
生まれてたる女の子
あさってが
三つの誕生日のミヨちゃんが
我が身の恥を忍んで
お見せする
この子の母の気持ちと
さらにまた
このミヨちゃんの芸のいじらしさを
皆さま方には
とくと
愛でたもれ
さあさ
今をのがしたれば
一生の不覚でござい！
ウソかまことか
まことかウソか
中に入って
ご覧になれば
一目瞭然
二つ目玉で
ギョロリっと
お確かめあれ！

お代は
見物をされてより後
出口の箱の中へ：
払うも払わざるも
皆々さまの勝手でござる
が たった百円
百円なれば
おなぐさみには安かるうぞ
安いものぞ
百円でござる
お払い下されよ
出口の箱の中へ
必ず
お入れ下され！
百円玉を一枚だけ！
二枚なれば
をお結構： いくらでも
お気持とあらば
ありがたくもらいもうす！
さあさその娘さん
別びんの娘さん
ほれほれ
スカートの短いあんた！

のぞいてないで
お入りなさい
入った！
入った！
手間はとらせぬからと
さそわれて
踏み込んでた見世物小屋
うすぐらい臭気満ち
舞台にあるのは
あれ！
見覚えある女と
よくよくみれば
さもあらん
己が姿があるもある
己が
異形のいびつさに
その気味悪さに
鏡のせいよ……と
口惜しく
ぶりぶりと足早やに
外へ出て吸った空気
人いきれ
タバコの臭い

わたがしのいろのある
祭りの夕ぐれに
はなやぐ夜店の
水風船
手のひらのたわむれ
幼ないメモリー
かれが飛ぶ可能性
その希望が
月へと昇る日は来ぬか
我らには
対に沈んだ澱みがあるに
月へと昇る
夢もないか……

詩

特集

御霊園口 哲郎 こと
寒苦鳥 頑 愚 こと
北山基明

(編集)

堀本 吟

気軽く編集などと云うもんじゃない。おびたらしい詩と版画、参りました。それにいわゆるハートがあるので余りさわやかじゃない。酷暑、彼はどんな熱い人生を歩む人か。私ごときの批評の枠をこび出て、己れの等身大を投げ出して下さい。本当は、写真製版かなにかで、文字も、絵もみせるとよくわかると思う。そのときの編集にわたしより大鳥潤あたりが適当だろう。しかし、この人とか大鳥潤、書くことと生活の確立がしょっ中かみあわないようである。そういうところが「ユニーク」なのだろう。うっかり「書きなさいよ」などといえないア・ン・バ・ラ・ン・スがある。

||ぶあん|| (署名) 寒苦鳥 頑 愚

S 47・8・18

古びた時計が
い
き

りな
すざましい音をたてて
じーじーじーじーじーと
逆にまわりだし

暗闇のなかに
真白色の
水銀のように美しい糸が
ほ
く
の
あたまから
ぶあんーと
とび散った

1972.2.22

編者註：この原稿の裏に版画作品が刷られている。白い線で彫り込み、瞳孔のない人間の丸坊主の頭部から「真白色の、水銀のように美しい糸が／ぶあんーと」とび散っている。この人はペンネームも恣意的で御霊園口哲郎がこの版画の作者である。本当の名前は必要ならんたろう。版画作品の方が美しい。ことばは、イメージ

を直接に伝えられた！と感じた個所度々ある。

||私のみたる仏陀|| (署名) 御霊園口 哲郎

四角い暗闇の隅に
私が眠って居ます
と
どこから ともなく
雲に乗った 仏陀が
あらわれました。

仏陀のおなかは
りんげつのようにで

みょうなことも あるものだ
と
思っていますと

いきなり口をあけて
くもの糸のようなものを
吹きだして
いずこえか去りました。

のこされた糸を
よくよくみますと
その上に
無数の小さな仏陀が

鎮座して おりました。

||生きて 活きよう|| (署名) 御霊園口 哲郎

友よ 未知の友よ
影ろうのように
地球が波立ちだした
としても……
生きよう

幽鬼のような
あのとこのままの
秋の風景が
目に飛び込んだ
としても……
生きよう

そのときのままの
己れに愕然とした
としても……
生きよう

灼熱の乱層雲が
己れを焼き尽くさんとしても

寒極の水柱が

己れをつらぬかんとしても……

生きよう

生きて、活きよう。

編者註：編者というのはおこがましいから便宜上、取捨選択にたずさわった者ということにしてもらって、おびたらしい「ことば」作品と「版画」作品、友人への半公開私信の便りに触れていると、この人のかぎりない素朴さが伝わってくる。彼には仏教ないし東洋風のニヒリズムが濃い影をおとしているのだろうが、そういう角度からみて、私はわかるところと、わからないところがある。それから「辻潤」の系譜をつぐ孤独者の気持がわかるのと、わからないところがある。で、全作品を通読しての私の感想だが、バセティクな感興に自らのめりこみ、気狂いになりそうな精神的たかまりのなかで書くとき、書くこと自体に意義がある。けれどもおおむねその作品は、作品としてはオブティミスチックな稚さにあふれてしまう。私はこの人の作品は好きだ、凄いとこるもあると思うが、ことはを肉体からそぎとろうという意味でみるならば、ものたりない。どういうでき方をしどういう表現を獲たものが作品なのであろうか。ここにはのせないが「狂ってよかった」などといわないでほしい。辻潤は（辻潤的であるということは）無気力と知的

上昇心の交錯する自己という容器を、本当に等身大のものとして、投げ出してみせようとしているところに独自性がある。これは覚醒的な思想の態度で立派だと思ふ。寒苦鳥さん、奇妙な「辻潤」氏、辻潤的感傷などおっばらって、真白き大道を探して下さい。次の作品は、強くて好きだ。

|| 夢違観音 ||

(署名)

北山基明

真夜中にひとり起きて
俺は夢違観音を彫る

△透明な人類の巨大な足跡Vを
求めているわけでもないが

俺の夢の中の第四次元空間に
ひそかに夢違観音がひそんでいて
俺の夢をじっとみつめているかも知れぬ
と思ったりしながら
俺は夢違観音を彫る

夢湖3年5月17日

|| ねむっている人 ||

(署名)

御霊園口

哲郎

ビルの上や林のなかに
淋しそうな顔をした
人がねむっている

ねむっている人の
からだは美しく
傷はみられないようだが
よくみると
かすかに 残っている

猫にかまれた
傷跡が
足首のあたりに
かすかに残っている

かの人達の
傷跡は
ひどく痛むのだろうか

ぼくの傷跡は
時々

おもいだしたように
びくびくと けいれんする

編者註：「ねむっている人」の原稿のうらがわにはおぼけのように足の無い長いかみの女がいて月にむらくも、ろうそく様のものふしぎに絵になった「版画」作品があり、次の「和歌」がチヨコチヨコツとかきとめてあって「おんなをば 法の御威といふど実 釈迦も達磨も ひよいひよいと生む 一休禪師。」因みにこの一休というボウさんは、屏風から虎をおいたすだけあって、心情の苛烈、過激この上もない人であったと、「パイデアロ」笠原伸夫「地獄の見る者・一休」という文章に紹介があった。成る程、すべて成る程、である。次のは少々、華麗(?)この人、時にはこんな生活もしているよ

|| 黄金の蟬蛸 ||

(署名)

御霊園口

哲郎

彼女に きつすをしてから
ぼくは自分の部屋にかえった
暗い部屋で炊飯器が
ぶすぶすぶすと白い泡を吹いている
口笛も軽るく ぼくは
万年ぶとんに手をのばした

シャアツ シャアツ シャアツ シャアツ シャアツ

警告を発する無気味な音だ
ばあっとふとんをはねてみると
びびん びびん びびん と
からだをふるわせながら
はねまわる

凍りつくような黄金の蝶蚣だ

シャアツ シャアツ シャアツ と

奇声を発して攻撃してくる

からだをかわして

ぼくは一撃を加えたが

蝶蚣の攻撃は

びびん びびん と早くなるばかりか

「あなたを 死人よ」と

すばらしい声で歌っているのだ

ふせぎきれずに ぼくは

飛び出して ナタをつかんで一撃した

バサッ 黄金の蝶蚣は

真二つになって落下した

刹那ばあんと血が流れて

地面にすいこまれるように消えて

真赤な美しい椿が

ばあっ ばあっ ばあっと咲いた

私など同時におもうのである。他人に、何かをみせること、自分の抜き差しならぬ姿をみせること、これはひとつのテである。儘ない方だけ自己昇華への一歩である。そういうことで告白文学などいつまでもすたらないのかもしれないが、そのときでも日常性のレヴェルに固定化させないことばというもののへの接近を自ざそう。私のささやかな決意だが、「不定形」周辺での知り合い中、この人が私の心境に最も近いのではないだろうか。以下「毒念的素描」と題する教編、それからあんまり面白くないので編者の越権でボツにしてみました、「房中寺妄談」という寸評や、エッセイあり。なぜ面白くないかというと、散文をかきはじめるつもりと楽天的な国家論みたいなののでてくるので、その理想状態は誰かかもう云ってしまったているよりなことだ。書く人が苦しいから、絶望的なことばより、たのしいオプティミズムの方がよいかもしれないと思うこともあるが、のちのちまでここにのこるものは、葛藤の修羅図・読み手というのは残酷な期待をしてしまうものだ。しかし他人のことなどかまわずに、今後も速慮なく書いてもらうために、「房中寺妄談」一節、それから、「毒念的素描」から抜粋して、おしまい。明朝、私は実家帰りに旅立つ。忙がしいので荒っぽくなりました。ごめんなさい。いづれ又。ついでだが、この人のマルクス認識は一寸私には単純すぎるように思える。マルキスト一人一人は、いたってヒ

編者註：強迫観念というのは、誰にでもあると思う

のだが、この人にも強いようだ。もっとも私は日がな一日悩まされている。あまり狂いまわると人目もあってみっともないから、必死に抑制しているが、時々馬鹿らしくなる。馬鹿らしいと思うと、すうっと肉体の中からヒステリアが去るのである。この人、にはもう永く会ったことがない。「不定形」創刊のころ一・二度ボツボツと話した。気のよわそうな人なのに、過激な心遣の所有者なのだときいたことがある。今度大量に詩をみて、成る程と思った。私は女なので男の人の気弱さ、あらゆるいみでの脆弱性には本当のところ同情心はない。男は強くあって欲しいし、女にやさしく、対人的・社会的態度としては節度があって欲しい。しかしそうもいっておれないかも知れない。と思う。そういう強い男はどこか鈍感だし、つまり、私の理想に遠い。それに年齢三十にも則すると、いやなこと他人の弱さも、自分の弱さもみえてくるからである。見え方がたりないかもしれないがとにかく、裏だとか表だとかみえてきていやである。人間に開心をもちすぎると足をとられそうなので、どっか高いところへ逃げたいのだ。しかしこの詩を読んで思ったが、弱いところをさらけだすと、それは妙に生まなましい血にみちた「人間」性になるのである。他人に己れの「人間」をみせたものはすでに思想とか解達とか、そういう精神的存在の可能性へ一歩を踏みだしたものと

ユーマンなのである。と私は思っている。しかるに……これから先が問題だ。つぎにマルキストもアナキストもぼんとなにヒューマンなのか、という問題だ。

|| 房中寺妄談 ||

(署名) 御霊園口、基明

ことさら神や仏になる必要もなく、いわんや、人間らしい人間になれなどといわれてもぼくには一向にわからん。

宇宙の融合の一として、生まれた以上、馬鹿は馬鹿なりに半人前は半人前に己れを開示して生きればよいのであって、馬鹿や弱者が沈黙しなればならないような社会は是認することはない。

御相互に自由に気楽に生きられないような社会をつくれればよいわけで国家なんてものはいらない。

資本主義から社会主義へ弁証法的に発展するマルクスの観念と見取図を認識しなきゃあ死刑にするなどといわれても別に困りはしないが、ぼくには旧人類の言葉みたいで遠い過去に出会った風景のようなもので一向にわからんだけである。ぼくはぼくに、己れの馬鹿で半人前ぶりをおおいに開示して、あわよくば国家や権力とか、の過去の亡者をとむらってやりたいとさえ思っている。

大正61年5月3日

△焼死或いは凍死▽

眠むると虚空をのみ込んで
灼熱の乱層雲が近づいてきて
のがれるすべもなく ぼくは
焼け死に……

起きると地球全体がばりばりと

凍り始めて

からだがかちかちとふるえ

なすすべもなく ぼくは

凍え死んだ。

△つぶやき▽

精神病院の庭で

狂人は

花を

見続けていた

何時間も何時間も

あきることなく

狂人は

花を

見続けていた

そして

ぼつりと つぶやいた

「気が狂いそうなほど

きれいな花だなあ。」

△蠟地獄▽

病院の白い窓と街との対話

「奴の身からは 即ち逮捕済みだが……」

「奴の精神を 逮捕しなければならぬ……」

「いつまでも 反逆するなら 雷気ショックをかけてや

るさ……」

「われわれの口に合った 人間を造れ……」

権力的な社会のからくりは

貧乏を蠟地獄だ。

我が闘争

大三元

一、歴史に於る弁証法的発展
原始シャーマニズムに於けるシャーマンの役割は、殊に神に通じているということと、他の部族構成員とは別個の主体を形成している。

このことは、部族間斗争が激しく行なわれていた時代であれば、それだけ細化された形でその系統化が進んでいったであろうことは想像に難くない。

紀元前後に、我邦に如何なる形態を採っていたか未だ分らぬが、百余に分れていた部族国家であろうと想起される集団に於いても、この事実は当てはまる。

邪馬台の卑弥呼はそのことを如実に物語っている。

そして、その後の部族統一という事業の中で西洋歴史三、四世紀、栄んに進出して来た、大陸からの逃亡侵略部族、か或いは百余の部族の中から輩出して来たかは、定かならぬ一部族（私は、この一族の起源としては、前者の仮説を強く推進するものであるが、科学的には、今の処何等根拠を示し得るものではない。しかし今後我邦に幾多存する古墳、墳墓の発掘が進めば、直に証明出来ることを確信する。がその企ては、宮内庁なるものによって実力阻止されているのが現状である。が逆にそのこと自体

何等かの事実を物語っている様に思われる。しかしどちらにせよ、考古学上の興味である。)が、そのシャーマンの巧みな操作と懐柔によって祭儀を独占し、その武力を集中し支配体制を確立して行くのである。そしてその後、大陸からの渡来者を、自らの体制に練り込むことにより、彼等の持つていた専門的技能、能力をフルに活用して行くのである。そこには、一大テクノクライト集団が形成される。

そういう彼等であつてみれば、未だ技術的にも未熟であり、又大きな斗いを経験していない先住部族を打破り併合していくのは容易なことであろう。

原初、武力の絶対優位の下での、祭儀の整備と、そのシャーマンの系統化による、他部族の平定は次第に法制化され定着していく。

最初は無言の圧力であつた不文なる法は、序々に難解なる文章による成文法としてその形を固定化する。被支配部族の反乱は、法に対する反乱であり、体制に対する破壊なのである。そういう者達は無法者として圧殺される。

常に法は、実効的効果たる武力の行使を前提として存在する。

この実力行使の主体者は「官」であり、その忠実なる実行者は「吏」である。これは一方の極に於る神格化の

イデオロギー形成の進行と共に、その神性の保障の下に制度化され発展していく。その体制は官吏一体となって国家形成の確立と共に、序々に変化していく。

上部支配層としての「官」は、天皇族との血縁的結合の強化を計り、支配中枢にせまる。他方「吏」は国家形態の繁雑化に伯り下部支配層の量的拡大により増々、その当初持っていた「官」との結びつきを稀薄にしていき、遂には、その制度の枠外にはみだす。いずれの側についても、その制度の神授性を凌駕する部分が生まれて来る。それが公家政治であり、実力部隊の権力掌握としての武家政治なのである。そして後者の支配体制は祭儀、或いはその他のイデオロギー側面から乖離し自ら政治の主体者であると同時に実際の武力の行使者として独自に発展していく。

支配の確立は、支配層内部の一元的階層化を通じ、その系統化を計ることによって、為し得る。

一方被支配層内部に於いては、その経済的側面からの階層化が進行していく。

この二つの層は、支配||被支配という明白なる身分関係によって、階級対立を為すものであるが、激しい対立としては、顕われない。それは、一つに被支配層内部に於ける、経済的富の蓄積が権力への接近を可能にしていること。他方、正統的な方法として、文或いは

武に秀でることにより、支配者の目に止まり登用されることが可能であったことによる。一つは、バイブロセスとしての政治上層部への接近、もう一つは支配層末端への参加として一方の階級から他の階級への移行が可能であるということ、その対立が緩和されていたのである。

極端に言えば、丁稚、手代であっても努力しさえすればお城に登ることが出来るということである。

この相対立する絶対融和することのない階級は奇妙な密月行を続けるのである。しかしその甘い生活は固定化された体制として永久に続くものではない。

破綻は自己内部からはじまる。

各階級の上層は常に未来を現在に固定しようとする。一方その末端、或いは中層部は、より権力の中核に坐るべく未来を模索する。このことは、武が文に代り、文が武に代っても同様である。そして現代について言えば、議会政治が、新たな融和策の最高形態として付加わったのである。

田中角栄の存在を軽くみすごしてはならない。彼こそが現在支配体系を如実に示してくる。彼は一方の方途を昇りつめることによって権力の座を確保した。他方も一つ一つの残された方途によって着実に自己内部の階層化を強力に推し進め、権力の座へとひた走りに走り続ける日共、社民の連中がいる。

権力とは誰それが、或いは幾人がという個々の実体ではなく機構の問題として、今や我々の前に横たわっている。

常に権力の座というものは何人に対しても開放されているのである。過去、血縁の中に権力が求められたのと同じに、今や機構の中に求められる。これが歴史の中に流れて止どまる処を知らぬ公理なのである。

原始シャーマン、現在総理大臣は一農耕民から一土工に至るまでが手に出来る権力の座なのである。その方途が、甲の道を通るか、乙の道を通るかの相違だけなのだ。

田中角栄と毛沢東は同じ百姓の出なのだ。
周恩来と野坂参三は同じインテリゲンチヤの出なのだ。

近代政治学は明々白々とその系図を描く、マルクス主義政治学は、その系図を闇から闇へ葬り去り、自己の方途のみを明かす。

多くのインテリゲンチヤは、そこで躓き、泥沼へのめり込んでいく。そして己れ独り、沈みに沈んでいくのではなしに、多くの民の足をひっぱりひっぱりして道づれにしていくのである。一方無事躓きもせず通過し得た数少ないインテリゲンチヤ共も己れ独りの孤独に耐えかねて、同行者を求め、手を取り合って行こう

とする。

新左翼と言われる者達は多く、ここから出発する。経済的基盤から説明される権力機構の労働者階級による奪取。暴力、非暴力を問わず新たな権力の構築云々と説明されているが、先述の観点からすると、これも自己内部の階層化を解消し得ず単なる権力機構のめり込みで終るのは、何もソ共や中共の例を引き出すまでもなからう。

二、自己の肯定と否定

栖谷行人なる人物（私は彼が何者であるかを全然知らない。偶々眼にしたブント系同人誌「情況」六月号で何やら喋っている。）が「全共斗的な運動の側の問題として。大学紛争においては、弱いものを突いていくという発想があったと思う。最初はそのうでもないのですが、組しやすい相手やグラウンドでやっているとこちらも墮落するんですね。つまり相手は進歩的インテリだから、左翼を左翼の側から批判していけば相手は閉口するわけよ。そういう弱点をついていくということが、現在の差別反対運動、それと左翼系出版社なんかが一番いやらしくあらわれている。最初はそれでもないのに、だんだんいやらしくなってくるんですね。云々。」そして対談相手の磯田光一なる者は「常識ですよ」とそのボヤきに対処しているのである。

この対談を、衆目にさらす形で載せている以上、「情況」誌自身、過去幾多「全共斗」に関する文章を載せていたことを総括することなく、反故にし、可憐な対談をぬけぬけと載せること自体、「全共斗」運動を、インテリゲンチヤを柄谷と大差ない眼でみてみるとみて間違いないさそうである。

何も、インテリゲンチヤを大衆動員の有効なる手段として、大衆自身の持つインテリゲンチヤ拝跪に依拠して彼等を用いるのは、社共だけではなく、新左翼といわれる彼等内部にも巢喰っている病根らしい。

そして彼等がインテリゲンチヤをして口を開かせて、自らの意思を代弁させる、と同時にインテリゲンチヤにとってみれば、彼等の中に自己の、或いは自己同質性の活路をみい出し同衾を始める。

悪しき前衛のはじまりである。

柄谷に一言、言っておこう。「我等、全共斗運動を担った部分は、そんなケチなことでは彼等インテリゲンチヤをやったのではない。第一章で述べた弁証法的な権力の発生そのものに対する実力阻止であり、前衛主義の否定であったのだ。」

言葉尻をとらえて、場足を取るつもりはないので括弧の内には入れぬが、そういう彼であればこそ、私が全存在を掛けて闘った全共斗運動を「紛争」なる一語で切っ

て棄てるのが出来るのであろう。

全存在を掛けるとは、着実にインテリゲンチヤの道を歩んで居た者が、その道の後戻りしつつ、その戻って来た道を再度通れぬまで破壊しつくすことを言うのである。それが自己否定の道である。

当時、「全共斗」の思想の中核をなしていた「大学解体」の思想内部には、未だその自己肯定的側面が強く残っていた。それは「日帝支配体系としての大学」否定であり、「大学の帝国主義的再編成の阻止」であり、或いはその最も愚劣な政治路線である処の「日帝の最も弱い環としての大学」という位置づけである。

そこには未だ逃げ道として、「自主講座」や「反大学」なるものの存在を許し得る。

退路を断たねばならぬのだ!!

我等は「大学破壊」を叫んだ。如何なるインテリゲンチヤの存在をも否定したのであるが、未だ我等自身、充分に、明確にその理論展開をなし得ず、唯ワフワフと「大学破壊」を口にし、インテリゲンチヤに対する不信をぶちまけるだけであった。そうであればこそ「自主講座」や「反大学」を否定し得ず、政治的意味づけで、骨定的に推進したのである。しかし萌芽的ではあれ、第一章を導き出すべき道を歩みはじめていたのである。

矢張り時を必要とした。

迂余曲折、試行錯誤の後にたどりついたのが第一章の

結論である処の歴史発展の阻止である。

その人の思想が、右に属すか、左に属すかの問題ではなく、その思想者自身、己れが思想と共に如何なる行為をなすかに価値を求めねばならない。

三、明日に向けて撃て

六十年反安保斗争に於いて、国家独占資本主義に敵対する階級的視点をとり、日共に敵対していったブントは、その後分裂分派をくりかえす中で、六九年共産同赤軍派を生みだすに至ったが、赤軍派自体分裂していき、日共左派（安保共斗）と共斗形態をとる連合赤軍（統一赤軍一派を輩出するになる。

これは単に武器のための共斗ではなく、理論的左面での統合をも意味し、遂には、ブント理論を民族主義的視点へ我邦に於いてはそれが如何に犯罪的であるかを無視してのめりこむという退行をも示しているのである。このことを無視し、赤軍派内部に於いても批判されている様な、森某に責任を総べて負わして、事終われりとする態度は許せない。

連合赤軍（統一赤軍）を理論付けし、行動に支持の声を上げた者、又そういう理論的退廃を許した者、等総べての者の無責任性の結果が妙義山中の虐殺なのである。

結果のみを批判、否定しても帳消しされるものではない。

い。死者は、生きかえらぬのだ。それならば、いっそB・L主義者（日共を除く）の方がましだ。彼等ならば、未だ我邦に於いては、人を殺していない。

しかし、私はいずれの立場にも依らない。権力発生のメカニズムを第一章で記した如く、私はその権力発生の根源である処の左翼インテリジェンスによる階層化を否定する立場にある。これは自己に課せられた責務でもある。そうであるならば、既存マルクス主義諸党派の立場とは絶対相入れないものである。可憐な立場からでもなく単に思想上の問題としても、赤軍と、それを支持した総べての者の無節操さに対して憎悪する。

赤軍シンバサイザーを自称或はそれに近し、と言っていた文化人と言われる人達よ、何故諸君は妙義山以降沈黙してしまったのか？何も無意味な自己批判とやらを求めつもりはないが、如何なる事態に際しても、自己の思考信念を明らかにするというのが、唯一要求されているのではないか、そうではなく、調子の良い時だけシンバサイザーぶって、お喋りするのであれば既存権力に媚を売ると大差ない。仮に彼等と共に、実践者としてもを言うのなら、華々しい時に声を立てるのではなく、死にひんしている時にこそ、弁護せねばならないのである。

真に左翼インテリゲンチヤならば、そういう立場をとれ。さもなければ最初から沈黙を守れ。

処が事態は全く逆である。これは、左翼インテリゲンチヤの最も醜い、仮面を剥がされた素顔なのである。

第一、第二章で述べた如く、権力は、その機構の實際的運用者として、或いは懐柔的緩衝として、インテリゲンチヤを必要とする。インテリゲンチヤにしてみれば、自己のインテリジェンスが、単に形而上学的学問としてではなく実践的科學として実用し得ることに満足感を抱き、政治権力に近づく。

そういうインテリゲンチヤであつてみれば、自己党派、体制に都合の良い時は、大衆を領導し、風向きがかわれば、大衆の後ろへ逃げ込むことが出来るのだらう。

革命の主体としてのインテリゲンチヤは、インテリゲンチヤとしての社会的地位を、放棄し、或いは、それには程速い位置にいる者が、唯一なり得るのである。

一方、大衆とは、自己の一の主張を持たぬものことであり、自己の主観的欲求充足を外部の力に依りて、出したり、ひっこめたり出来る人々を言うのである。反面自己の欲求充足のためには、外部の力が如何に強力であっても、素手でぶつたつて行こうとするのも大衆である。何等、妥協を許さず、直線的に手に入れようとするのである。インテリジェンスは妥協のための手段になり下る。

結論を急ごう。マルキストが多く経済的基盤から権力

を規定するに對し、ソヴェト連邦や中国の所謂社会主義国の経済体制をもち出して批判するまでもないが、私は、インテリジェンスによる権力機構の発生、接近妥協を述べて来た。このことから言えることは、こういう作用としてのインテリジェンスの否定である。そして今後増々、私はインテリゲンチヤに敵対していくであらうし、攻撃の手を弱めることなく、強めていくであらう。

私は、インテリゲンチヤ諸君の立場で言えば大衆のもつ最も愚劣な面、妥協というものを知らぬ。何が何でも欲しいものを手に入れる立場にいる。そうであるならばささいなことであっても、大衆を領導、指導して行こうと考える者、即ちその為の妥協を教えようとする者には、容赦なく鉄拳を加えるであらう。それが唯一、私にとることの出来る斗争手段である。

明日に向つて撃つ拳に、当るのは君の顔面かも知れぬ。

集団不定形投稿歓迎

ジャンル || 自由
テーマ || 自由
枚数 || 自由
締切 || 不定

投稿せよ！ さらば開かれん悪の道！

リベルテール ¥ 一〇〇

毎月一回発行

リベルテールの会

東京都練馬区大泉学園町 2190

荻原 晋太郎 方

飛 磔 (月刊誌)

¥二〇〇

京都市上京区河原町荒神口東入
日本バプテスト教会気付
飛磔出版委員会
振替京都四二六三七番

大杉 栄追悼五〇周年集会へ

向けて組織せよ

予定日時 一九七三年九月一六日午後二時

予定場所 京都会馆会議場

(京都・市電市バス岡崎公園前下車)

全ての同志は九・一六集会へ向けて準備せよ！

日本アナキスト連盟の解散と「自連」の出版

(日本アナキスト連盟機関紙「自由連合」一九六九年一月一日掲載論文)

太平洋戦争敗戦の翌年昭和二十一年五月に結成し、以後曲折はあったが、戦前昭和初頭に衰退の極に達したアナキズムを革命思想として今日まらしめたものが日本アナキスト連盟であったことはすでに確言を要しないところである。むしろ一九七〇年前を前にして、為すあるべきことを期待されつつあるとき、わが日本アナキスト連盟は昨秋の大会において突如のごとく解散を宣言した。何故の解散か、何故の後退か、という質問はわれわれに殺到した。

無論解散は頽勢の致すところではなく、後退のしるしはどこにもない。われわれは前進と強化と拡大のためにこそ、連盟の解体を踏み切ったのである。おそらく、かかる敵前散開こそ、われわれのみが実行できる戦略戦術であろう。

1 アナキズム運動にとって組織は常にのりこえられるものとしてそこにある。一九四六年の結成以来連盟はアナキズムの旗を高くかけ種をまき続けてきた。そしてその種は今や全国のそここで新しい芽となり成長しつつある。

一九四六年を戦後の第一の開花期とよぶなら現況は正に第二の開花期のはじまりとよぶにふさわしい。しかし第一と第二の開花期の間には決定的なちがひがある。第一の開花期においては、埋もれ消えかけていたアナキズムの火種をほりおこし、それを守りひろめるといふ、いわば思想の保存と量的拡大という観点から運動はすすめられていった。そしてその思想はひとつの原理原則、ひとつのうけつがるべき伝統としてあり、民衆は連盟の外に啓蒙され宣伝されるであろう対象としてあり、連盟の思想上の位置は戦前のその延長線上にあった。もちろんその間そのような思考法や発想をのりこえようとする試行錯誤はくり返されてきたが、大勢としては連盟は戦前の思想をのりこえることはできなかつたし「一線を画し、そのままひろげていく」という発想をふくめることはできず、自己否定の契機をつかみえぬままにすごしてしまつた。

2 脱皮や飛躍のための提案や問題提起が幾度もこころみられながらなぜ大きな実を結ぶことなく終つたのか。それに

はさまざまな理由があるが、そのうちの最大のもの、思想上のことは思想上のこととして、運動上のこととは運動の方法論のこととして、組織については組織のもち方として論じられかたづけられてきたところにあつた。ひとつひとつの問題提起が、アナキズム運動即日本アナキスト連盟の事として、その内部の問題としてしか意識されず、そこからぬけ出してそれらを見るといふ場に達することができぬまま、思想と運動と組織という、もともと切りはなしえないはずの連なりがばらばらに切りはなされ、ついにひとつの円環として形成されえなかつた。

3 日本アナキスト連盟が新しい思想内容を生みだしえぬままに、大きな壁にぶつかつてしまつたとすればその解散は当然のことといえよう。しかし私はむしろその解散がその発展であるかに考ふる。

何故なら連盟自身がアナキズム運動の第二の開花期に直面しながらなおかつみずからを解体したことは、連盟がみずからの発想のパターンを自己否定したことを意味するからである。

4 連盟そのものに即してこの解散をみれば、たしかにひとつの歴史のおわり、ひとつの運動の死を意味する。しかしアナキズム運動全体から現状をみつめ、未来を展望するといふ立場に立てば、解散は決しておわりや死を意味するものではない。

もともと日本アナキスト連盟の存在の意味は、日本のさまざまなアナキストの自由連合体としてであつた。それ故連合体としてそれが存在するには、それ以前にまず多種多様なアナキストの運動とその組織体が存在していなければならぬ。ところが一九四六年の連盟結成直前、またそれ以後においてそのような多種多様なアナキストの運動や結合体は全然存在していなかつたといえぬまでも、それらがきわめて弱小な存在であつたことは事実である。それ故戦後のアナキズム運動は先ず連合体の結成から開始されることとなつた。しかしこのような運動のすすめ方は、アナキズムの立場からすればむしろ反対の逆立したすすめ方であつて(その当時の情況からすればやむをえないことであつたにしても)、そのためのゆがみとそこから発する停滞はその後ながく尾をひくこととなつた。このようなすすめ方から連盟の拡大強化をはかるうとすれば、いきおい一方通行の普及宣伝、啓蒙扇動、獲得奪取、取囲みといった既成左翼のそれとことならない図式の真似こととなり、連盟員は大衆団体の中から浮上つて孤立するか、あるいは大衆団体の中に完全に埋没するか、いずれにしても個人と連盟(連合体)を結びつける環は消え去つて、個人個人の日

常活動と連合体（連盟）との間に埋めることのできない深淵が発生することとなる。連盟と個人が直接対置される時この断絶はさげられないし、連盟の地方協議会という組織も連盟の下部構造であるかぎりはこの疎遠感を埋めることはできないし事実でできなかった。

5 しかし連盟のような全国的な連合体の存在が無意味であるとか、必要でないとかいうように考えるならそれはあまりである。たゞ連合体はあくまでも多種多様なアナキストの組織体がまず結成され、それらが成長し発展してゆく過程において、それらの諸組織が連合体を必要と感じはじめた時点において、それらの諸組織がみずから自己発展の成果として自己形成してゆくものでなければならぬ。そしてそういう新しい自由連合組織を形成する芽はすでに全国的に発生しつつあると私は考えている。

6 日本アナキスト連盟は解散した。そして「自由連合」は連盟の機関紙でない、いわばすべてのアナキストのための機関紙として新しく出発することとなった。しかしこの「自由連合」を連盟の事業の一部の継続として、遺産として考えてはならない。それは全く新しいなにかとして出発しなければならぬ。「継続」ではなく、単に「機関紙」の肩書をとり去ったものではなくて、ほんとうにみずからの運動のためにそれを必要とする者がその発行をみずからのこととして参加し、それらの人々たちによって実際に動かされ、さざえられ、新しく形成されてゆくものでなければならぬ。いいかえれば、旧連盟員が計画し、その他の人々がそれをひらかれたものとしてうけとり、それをたすけるというかたちではなくて、はじめはそうであっても、できるだけすみやかに、自分自身の運動として意識する人たちが原稿をかき、あるいは企画し編集し、配布し、拡大してゆく、つまり「自由連合」を他者として「継続」や「下降物」としてみるのではなくて、その実内容をみずから変革し形成してゆくものとして意識される必要がある。

7 新しい「自由連合」はすべてのアナキストの「機関紙」として、それらの人々たちの当面の、日常の運動の必要に応じた、実際の役に立つ、うてはびくようなものとならなければ意味はない。そのことはみずからの要求、みずからの運動の状況に応じて、いわば自分自身のためにこそ書き、つくり、くばり、ひろめてゆく新聞にしなければならぬということでもある。「自由連合」の発行そのものを自己目的としてはならず、原稿、編集、配布、拡張、といっ

たさまざまな作業にそれぞれ参加しそのような共同作業を通じて新しい連帯をつよめひろげ、そうして新しいアナキストの「あるべき」自由連合の実質が自己形成されてゆくことにこそ意味があり、発行のためのそのようなプロセスにこそ運動としての意義があると私は考える。

8 もしも「自由連合」の発行を自己目的化し、普及宣伝啓蒙のための政党の機関紙のように、誰かがつくり誰かに与える形の、一方通行の下降物としてのみ意識したり、あるいははくせんとしたひろがりの、アナキストチックで進歩的なリトルベーパーを志向するならば、旧連盟の発想のパターンをのりこえることはできず、アナキズムの諸運動は「自由連合」をおきざりにして進むだろう。そのようなものではなく新しい「自由連合」は、新左翼をも含めた一切の既存左翼の機関紙とは質的にことなり、発行のプロセスにおいて、自己と直結した単なる宣伝啓蒙や、ムード作りではない、自己確立、自己形成としての新聞となることによって、新しいアナキストの新聞の「質」を開示しなければならぬ。そうすることによって、はじめてアナキズムの諸組織が自立し、自己増殖し、新しい連合をかたちづかってゆくことを望見することができるだろう。

そうでなければ連盟解散の意味はどこかに消え失せてしまうことになる。（自由連合）をたすことによって運動し、運動することによってだててゆくという円環こそが「自由連合」をささえるものになるだろう。（大峰杉夫）

資料Ⅰ

全関西ノン・セクト連合救対規約

第一条（名称）

本会は、全関西ノン・セクト連合救対と称する（以下本会と称する。）

第二条（目的）

本会は、関西の地において国家権力及びありとあらゆる権力主

義との非妥協的な人間解放への闘い貫徹し、あるいは闘われんとする全ての人々の闘いを支援し、かつその闘争の全面展開を勝ちとるために、多様の戦術

第三条（任 務）

を有機的に行使する中で、自ら人間の解放を模索する。
本会は、前条の目的を達成するため、次の任務を行なう。
1 斗いの過程において、不当にも国家権力によって負傷させられた者に対する救援および不当にも逮捕された人々の奪還。
2 各々の地域、職場、学園等において斗われ、あるいは斗われようとしている斗争に対する支援。

第四条（組 織）

3 救済ニュースの発行。
4 他の救済組織との連絡。
5 その他、本会の目的を達成するために必要な行為。
本会は、次の機関をおく。
1 総会、本会の会員全員の意志によって構成される。
2 事務局会議、会員有志と専任事務局員等によって構成される。
本会における会議の運営は、以下の原則を基本とする。

第六条（役 員）

1 本会における会議の召集は、全ての構成員の自発的意志によって為されるが故に、誰でも召集する事ができる。
2 但し、事務局会議は少なくとも月に一回、総会は半年に一回開くものとし、その召集は、事務局がその会議の一週間以上前に全会員に通知しなければならぬ。
3 本会の方針決定は多数決制をとらず、合議制とする。
但し、合議不成立の場合は、少数者あるいは多数者の行動を妨げるものではない。
4 その他は、全会員が基本的に平等の権利と義務を有する事から鑑み、自分達の目的にそつた方向性を確認しながら、運営に留意しなければならぬ。
本会は、本会の目的を達成するため、やむをえず次の役員をおくものとする。
1、事務局長 一名

第五条（運 営）

第七条（任 期）

2、事務局員
3、会計 若干名
役員任期は一年とし、いつても会員の要求があれば総会にかけて更迭する事ができる。
本会の経費は、次の収入による。

第十三条（解 散）

発展させるためのひとしく平等の権利と義務をもつ。
本会の解散は、全員の一致によるものとし、解散に反対の者があれば、その時より、その者が本会を継承し、代表する事になる。

第八条（財 政）

1、会費
2、支持会費
3、カンパ
4、その他

第十四条（規約改正）

規約の改正は、全員の同意をえなければならぬ。

第九条（支 出）

本会の支出は、本会の機関によって確認されたものに限る。
又、対権力上許される限り、これを定期的に公表しなければならぬ。

第十五条（補 則）

1、この規約の昭和四十七年九月一日より、その効力を発する。
2、会費及び支持会費は、集団においては一口月三千円、個人においては一口月千円とし、その月の始めに会計に納入する事。

第十条（会計年度）

本会の会計の開始は四月一日とし、翌年三月三十一日で終わる。
次の者は本会の会員である。

第十一条（会 員）

1、会費を定期的に納入する者。
2、本会の目的を認め、それを援助する者。
3、その他本会の目的を達成するために必要な者。

第十二条（権利義務）

会員は、本会の目的を達成し、

あ
と
が
き

☆ 今号は原稿の締切をのばし、のばしにしたにもかかわらず、集りが悪かったのだが、ラストに急に集中し、次号への繰りのべもでた。それにもかかわらず発行が遅れ、昨年九月発行の予定が今年の五月と変わってしまった。次号までは「黒光」(ガリ刷、月刊)で不定形発行の間を代行する予定です。しかし我々はそのから出発し、「空へ向って飛ぶんだ」とうそぶき、誰にもだまされないうちに自分の言葉でもって語り、自分の足で歩こうと思っ

(小三木)

☆ 革命と反革命は同一物だ。勝てば官軍、敗ければ賊軍、はたまた正義は誰なのか。最後の審判、誰がやる。神様、それともインベーター、ノストラダムスはどうゆうた。

(黒本)

☆ ガンバラなくっちゃ、ガンバラなくっちゃ、金はなくともガンバラなくっちゃ。しかし、やっぱりM作戦かな。

(白川)

☆ いまやマルクス主義は反革命の本質を暴露した。ついでにアナキズムも化けの皮がはげようとしている。スプリー、黒のスプリー。早くもって来い。

(山川)

☆ 女は反革命です。但し男をふった女は革命的ですよ。おまけに男はなべて反革命です。結論、世界はみんな反革命。それじゃ、安心していつでも転向できるもんな。(陰の声)馬鹿! そんな事したら逆に革命的になるじゃないか。総括! 総括!

(秋月)

☆ 地下運動を目指そうとしたが、日本では地下道等が未完備なので、無理だからやめにして、地下鉄の抗夫でもやるか。でもこの頃は地下の酸欠が多いと聞くのでそれも駄目なのだろうか。

(北原)

☆ 同志の行方不明者続出! 警察へ捜査願いをし出そうかな。何んて言っても、日本の警察世界一だもんね。

(大)

☆ 巷に秋の来る如く、我が心にも飽きは来る。ああ、もう日和見はやめた。やるんだもんね。これで私もおしまいな。

(五木)

☆ 諸君、黒ヘル魂を忘れるな。

(北川)

☆ ④がなんだ。私服がなんだ。自衛隊がなんだ。日本警察世界一がなんだってんだ! 上等じゃねえか! 俺はアナキスト的渡世人よォーやってやるうじゃねえか。暴動の一つや二つ。ついでに世界革命でも。だてに黒ヘルかぶってるんじゃないぜ! オレッチーは黒ヘル渡世人よォー!

(末広)

以上

全てのアナキスト、ノンセクトは

全関西ノンセクト連合救済へ

結集せよ!

全関西ノンセクト連合救済

全関西のアナキスト同志諸君!

無党派自立革命派の同志諸君!

今日国家権力による我々や、反権力陣営に対する弾圧は、日々をへることにますます狂暴化してきています。

それは我々を含めた新左翼全体に対するマス・コミを総動員した「過激派」キャンペーン、ひいてはフレームアップ策動として現象面化してきており、事態は我々にとって逼迫のならないものになってきています。例を挙げると、十月社事件、朝霞事件、テルアビブ事件を理由とした無差別弾圧であり、今日の「釜ヶ崎斗争」に対する権力のデッチ上げ斗争破壊策動は如実にそのことを物語っています。

まず我々の戦線においても、古くは東京「背叛社」事件にみられる警察スパイの挑発行動、それに伴なり「アナキスト」超過激派「キャンベーン」、そして昨年においても名古屋における「少年スパイ」事件、京都の民学同事件、九大アナ研に対する「爆破」デッチ上げ強制捜査、等々の国家権力の我々に対する破壊工作、封じ込め

策動がみられ、今年に至っては京都「竜大入試バトカー襲撃」デッチ上げ事件や名古屋「交番襲撃」事件等々を利用したアナキスト殲滅を目的としたより巧妙なより悪質な破壊攻撃、スパイの送り込みに扱々としている。それは更なる反革命治安体制の確立を意味している。

もちろんこれらの状況は個別我々に課せられたものではなく、権力に対して斗かう全ての人々にかけられている攻撃である。もとより我々はこのような反革命弾圧に屈するものでは決してない。我々の斗いはこの予防反革命を破壊し、国家解体、国境廃絶、人類解放、永久革命の黒旗の下、無政府社会を目指して更に一層すすめられねばならない。

しかしながら我々の戦線は今日的には、未だ地方的限界を突破しえておらず、全国的有機的連合を獲得しえていない。それは我々の戦線が最初が自然発生的存在であったからであり、その欠陥として未だそれを克服できていなかったからである。国家権力はこれを突破口として我々の戦線を分断し、各個撃破してきた。

我々はこのような状態に甘んじている訳にはいかない。我々は早急な全国的な斗争体制の確立を獲得すると共に、それを保障する全国黒色救援会を樹立しなければならぬ。

我々はその第一歩として、ここに全関西ノンセクト連合救済を設立した。全ての闘うアナキスト、ノンセクト

諸君に対してこれへの参加を要請するとともに、救対活動をより有効的に活動させんがためにも、定期的なカンパと助力を期待するものです。

一九七二年九月一日

カンパ送付先

郵便振替 京都八六二二番

京都アナキズム研究会 気付

集団不定形第九号

¥200-

予定発行日 一九七二年九月一日

実際発行日 一九七三年五月一五日

編集者 元暴力学生の一味徒党

発行者 自称アナキスト官僚群

発行所 京都アナキズム研究会

京都市左京区北白川西平井町9の1

辻 方

京都アナキズム研究会

郵便振替 京都八六二二番